
宿り木と鎮魂歌

あひる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宿り木と鎮魂歌

【Nコード】

N6650V

【作者名】

あひる

【あらすじ】

一握りの死人が、生前の姿そのままに生まれ落ちる世界がある。彼らは異邦者と呼ばれ、ある理由で蔑まれる存在だった。また、魔術と呪術の存在するその世界は、不自然なほどに文明の発達が遅れていた。まるで、不可視の力にでも押さえつけられているように。転生した楠木奈々人は、呪術によって早々に絶対服従する傀儡人形と化してしまう。魔法都市にて、『死人』と呼ばれる女主人に仕える傍ら、あの人の足跡がちらついて……

第一話 落下

外から漏れ入ってくる篠突く雨の轟音が、窓を通り越して室内に響く。既に日は沈んでいる。開けっ放しのカーテン。差し込むはずの星明りは、天を覆う分厚い雨雲に阻まれており、その代わりに、遠く離れた繁華街の光が申し訳程度に室内を照らしている。しかし、薄暗いそこには目につく家具類がほとんどない。パソコンの乗ったデスクに、青を基調とした寝具のみである。壁掛け時計すらないのは、一体全体どういう事だろう。家主も、これでは少し飾り気がないと思つたのだろうか。部屋の隅に腰の位置に届くかという背丈の観葉植物が置かれていた。ただそれでも、室内に充満する寂しさを完全には拭えてはいなかった。何一つ動かない室内は、まるで時が止まっているようだ。

ガ……チャリ

そんな間延びした音と共に、玄関のドアの輪郭が、黄色く浮き彫りになってゆく。半分ほどドアが開き、その隙間から一人の青年が玄関へ倒れ込んだ。髪も、学校指定のブレザーも、手提げの鞆までびしょ濡れだ。この豪雨の中、傘も差さずに帰ってきたようだ。前髪から水滴を垂らしながら彼は俯く。その身体は小刻みに震えていた。

彼は立ち上がると、おぼつかない足取りでリビングをを目指す。

途中、渦巻く激情に耐えかねるように、カ一杯壁を殴りつけた。

しかし拳から伝わる振動は、彼の心に響くことはない。そもそも彼に心などあるのだろうか。そう思ってしまうほどに、彼の目からは生気が感じられなかった。その口は虚ろに開かれている。天井の蛍光灯が光を灯すと、元より殺風景な室内は隅々まで明るくなった。ずると引きずる足が止まった。着替えもせず、シャツが濡れることもいとわず、ベッドへ力尽きたように倒れ込む。

しかし十秒も過ぎぬうちに彼は跳ね上がった。そして、猛烈な勢

いで寝具を何度も何度も殴り始めた。スプリングが軋む。無駄なことでとは重々承知の上で、それでも、何かに当たらずにはいられなかった。あまりに激しいその乱舞に、身体に付着していた水滴が部屋中に振り飛ばされる。枕が宙を舞い、壁に当たってどこか抜けた音を出す。彼は荒い息を押さえようとせず、まるで獣のようなうなり声を上げると、近くにあつたデスクを蹴り飛ばした。けたたましい音が反響する。黒塗りのコードに巻き付かれたパソコンが、裏返しに床に横たわっていた。それを見た彼の瞳孔が、すうっと、広がった。

彼はパソコンを勢いよく踏みつけた。ミシミシツという音がする。「こんな、物さえ、なければ……」

無機質な白い明かりの下、絶望の権化と化した彼は、キッチンへと歩みを進める。足がもつれそうになっても、彼は構わず進んでゆく。

彼はこの感情を何かにぶつけたかった。

彼が吸い込まれるように見たものは、台に立てかけてあつた包丁だった。彼の口角が歪にひしゃげ、唇の隙間から笑い声がこぼれた。残忍な笑みだった。彼は躊躇わずそれを抜き取ると、ぎゅうつと握りしめた。全ての細胞が外界の刺激を受け付けない中、茶色い木製の柄が返す反発力だけが、彼の全てだった。右目の前に張り付いていた湿った前髪を鬱陶しげに掻き上げると、なぜか彼は穴の開くほどその刀身を観察し（刃先には何か赤黒いモノがこびり付いていた）、満足そうに頷くとまたもや奇怪に肩を震わせて笑う。武器と呼べるものを持ったことで、何かに対する優越感でも感じているのだろうか。それとも、太古の昔に存在していた野人の血？ 遣伝子が歓喜に震えているとでもいうのか。どちらにせよ、気味が悪いことこの上ない。

彼は部屋を見渡す。眼球が、獲物を求めて上下左右に動いた。視界に捉えられたものは、先ほど投げられて壁面近くに転がっている青い枕。彼は獰猛な笑みを浮かべると、動かぬ獲物へと飛びかかっ

た。ざくつと一刺し。さらに彼は手の中で刃物をくるくる回転させると、頭の上で、両手で逆手にがっしりと柄を包み込んで、再び振り下ろす。

彼はいつしか口を開いていた。

「てめえのせいだつ！ てめえが昨日泣きついたせいで、あの人は無益に死んだんだよつ！ なんて耐えきれなかった！ なんてあの人をこの町に呼んだんだ！」

傍目から見ても、『異常』それ以外には言い表せない。彼は、尚も世迷い言を枕へと吐き出し続ける。その目は充血し、顎からは涎がしたたる。鉛色の刀身で幾度となく刺された被害者は既に原型を留めておらず、血の代わりに飛び出した白色の羽毛だけが、さも楽しそうに彼の周りを演舞する。

がっ

遂に、枕を貫通した切っ先が艶やかなフローリングを削った。

彼の動きがびたりと止まる。何一つ動かない。追隨するように、羽毛は全て床に落ちてしまった。そうだ。彼が止まれば全てが止まる。例え時間でさえも例外ではない。

実質、彼はこの部屋の支配者だった。止めることも動かすことも自在だった。

ただ一つ、巻き戻すことは不可能だったけれども。

ぼたっ……ぼたっ……と、枕が濡れる。その水滴の軌跡を辿れば、もはや何の光も返しはしない、あまりに黒い瞳があった。彼は徐々に包丁を引き抜くと、床にごろんと仰向けになった。視界の先には濃淡のない白い天井が広がる。目端から、雫が垂れてゆく。ひくっひくっとむせび泣くその顔は、一分前の醜悪な顔からは想像も出来ないほどに幼かった。ここまで来れば、先ほどの奇行の理由が見えてくる。枕を何に見立てていたのかも、誰に向けて罵詈雑言を浴びせていたのかも。

「戻ってきてくれよ、なあ」

彼は突然身体を強張らせたかと思うと、虚空の眼内に怒りの炎を

宿して、天井：いやその先にあるはずのものへと、手にしていた包丁を投げつけた。鋭く回転する刃物は、しかし天井に阻まれてそれには届かない。物理法則に従って落下してきた包丁が、カランと乾いた音をこだませる。またもや、羽毛が舞った。

「ふっざけんな！ てめえにはっ……言いたいことが山ほどあるんだ！ お空の上でふん反り返ってないで、いつ……いい加減出てっ……こいよ卑怯者！ なんてあの人がこんな目に遭わなくちゃだつたんだよ！ なんてっ、なんてあの人だつたんだよ！ 答えろ、どうしてだっ！！」

彼は、天に向かつて声の限り絶叫する。カツと見開かれた眼。ぎりぎりと言を立てる両対の齒。その表情は、対象への並々ならぬ憤怒を感じさせた。何かを吐き出そうとして、しかし吐き出せなかった彼は、再度虚ろに笑うと、操り人形よろしく不気味に起きあがった。その右手には、やはり包丁が握られている。重心の定まらない首が、振り子のように揺れながら部屋全体を見渡す。彼は、次なる獲物を探しているのだ。しかし元々家具類の異様に少ないこの室内は、彼の望みを叶えるはずもなく……。彼は苛立ち交じりに床を刺した。そこで気付く。紺色のブレザーに包まれた役立たずの双腕が、目の前でいかにも当然とばかりに脈打っている様子に。めくられてゆく左の袖の下には、数多の傷跡が生々しく残っていた。包丁の赤黒い汚れはこびり付いた血だったのだ。どうやら彼は、日常的に自傷行為を行っていたようだった。

彼の瞳にどす黒い何かが溢れ出す。そして、素早い動きで振り上げた包丁の切っ先を、その柔らかな左腕に、微塵も躊躇せず突き刺した。「あぐっ」という苦悶の表情の中にも、どこか甘美めいたものを受け取る彼の精神は、やはり普通ではない。いや、そうすることにより、自らを罰している気分にも浸っているのだろうか。次第に加速してくる呼吸音。彼は、まだまだ足りないとはかりに右腕に力を込めた。ぐりぐりと、ほじくるようにして、刃は進む。その刃が骨に当たるとガリガリッと、進行を止めてしまう。溢れる赤

い液体が、腕を伝って床に垂れてゆく。錆びた鉄のような馴染みの匂いが鼻孔を付いた。

ここに来て、彼の五感はその痛みゆえに、並の鋭さを取り戻すに至る。右耳の方へ響くこの音は恐らく、隣の住人からの警告音。分かる。やつは壁の向こうで顔をしかめて「迷惑だ」と言っている。己の肩が上下する度に、不定期な息づかいが嫌でも聞こえた。今思えば、先ほどからチャイム音が鳴りっぱなしだった。誰だ？ ああ、五月蠅い。皆、五月蠅い。いっそのこと殺してしまおうか。彼は、腹の底から煮えたぎるような殺気がわき上がるのを、傍観の眼差しで眺めていた。もうどうでもいいのだ。全てを壊してしまいたい。彼の心は虫食い穴だらけだ。ここ半年、彼の傷を埋めてくれていた彼女は、彼自身の愚鈍な行為によりこの世を去ってしまった。あの時自分が引き返していれば、彼女は今頃……。

自責の念は、沼の如く口を広げて彼を飲み込もうとする。しかし幸か不幸か、彼女の名に反応して、脳内に彼女に関連する記憶が展開されてゆく。まさしく走馬燈のように。

「自業自得、か……」

鮮やかに浮かび上がった彼女の可愛らしくも華やかな微笑みに、破壊の衝動は容易く奥底へと押し込まれる。彼自身も、釣られて穏やかな笑みを溢した（やはり幼い）。震える唇で彼女の名を呼んだ。どれほど時が経っただろうか。ふと、彼の表情が苦痛に歪んだ。

下を向けば、辺り一面が血だまりと化していた。随分と長い間、追慕の念にかられていたらしい。それを認識するやいなや、脳裏に浮かぶ少女の姿がかすれ始めた。出血多量、頭に詰まったみそは、彼女の像を結ぶことすらままならない。細胞という細胞が抜け落ちてゆく感覚。彼にとって、それはもはや事務的な事象とすら思える。身体の末端から波のように、スイッチがオフへと切り替わってゆく。

このまま自分は無くなるのだろうか。けれど、これでは……。

無情にも薄れてゆく彼女の姿が、彼の中に『眠っていた何か』をかき立てた。思い出は刻一刻と消えてゆく。このままここで冷たく

なる事を許可すれば、自分の迎える最後に、彼女の笑みは存在しない。独りだ。何ものからも隔絶された暗い意識の檻に捕らわれて、最後に相對するのが自分自身なんて、耐え切れるはずがない。散々な人生だったが、せめて最後までは彼女と共に眠りたい…。

蒼白な顔で立ち上がる彼の右手から、包丁が滑り落ちた。血の海に微かに波紋が広がった。紅色の刀身が、別れを惜しむように怪しげにくるくると回転する。血を滴らせつつ彼が向かう最後の場所は、大空。眠りに着こうとする身体に鞭打ち、彼は窓を開けベランダへと足を踏み入れる。彼は、最後に見た自身に思わず吹き出した。窓に映った彼の顔には、ようやく休めると、あどけなき安堵の表情が浮かんでいた。

ああ。気張ってたのかもな、俺

もはや、何の未練もなくなった、この大きな世界を見渡す。ここはマンシヨンの二十一階。吹き荒れる暴風が彼を部屋へと押し戻そうとするが、彼の足取りはもう揺らがない。空が泣いているかのようだった。土砂降りの雨が、彼の双肩を容赦なく、しかし、ただ無意味に叩いてゆく。瞳を染める漆黒は、前方の景色か、それとも彼の内側が透けて見えているのか。

彼は、場違いなほどに愉快だった。不思議な気持ちだった。社会に繋縛されていた身が、久々の新鮮な空気に諸手を挙げて震えていた。左腕の血は既に止まっている。数分もすれば、カウントダウンは0となり彼の時間は永久に停止するはずだ。しかし、彼はそれを待たなかった。欄干に身体が乗り上がる。空の彼方を見上げる彼は、目元を笑わせながらしゃがれた声で言った。

それが最後の言葉だった。

次の瞬間、二十一階のとある一室は完全に無人と化した。彼の身体が大気の中を鉛直に滑空する。胃の辺りに覚える浮遊感。後方へと流れてゆく景色を尻目に、彼は最後の思索にふける。自分はこの後、どこへゆくのだろう。思えば、死後のことなど考えもしなかつ

た。いや、それでいいのだ。彼の終わりが、実体をもって迫ってくる。不釣り合いな事はしなくて結構。彼は、すうつと目をつむった。
どさっ

その音は、篠突く雨音にかき消されてしまっていた。雨は天井知らずにますます強くなる。季節外れの台風なのだろうか。主を失った室内では、開け放たれた窓より、湿り気を帯びた風が吹き込み暴れる。それに巻き込まれたカーテンが、ばたばたとはためく。視線を向ければ、室内で奇怪な現象が起きていた。風のせいだと思いたい。あでやかに光る紅色が、なぜか未だに、部屋の中で哀しげに回り続けていた。

全ては忘れ去られてゆく。

時間の奔流が、人々の頭から記憶をぬぐい去ってゆく。

古今東西、様々な思想がぶつかり合ってきた。

死後、我々はいったいどこへ向かうのだろうか、と。

彼の第二の人生が、全ての人間に普遍的に当てはまるとは思えない。
い。

だが、確かな一例がここにある。

こうして楠木奈々人の、贖罪の旅は幕を開けることとなる。

第二話 駅（ターミナル）

『そこ』に男がいる。

木製の安楽椅子に身を預け、紅い盃に口を付ける男がいる。

男は、足まで覆い尽くす煌びやかな長衣をまとっていた。美しい花々の刺繍が、所々に施されている。座っただけでも分かるほどに長身だ。容姿は眉目秀麗、ともすれば女とも見受けられる品のある顔立ちをしている。また、特筆すべきは鮮やかな、その虹色の長髪だ。髪が七色に分かれているわけではない。男を照らす光の角度によって、時に灼熱を思わせる紅色、時に深海の暗青色へと、刻一刻と色彩が変化しているのだ。一漆うるしでも塗ったかのような光沢を見せるその髪は、しかし、ただ一色、漆黒の美だけを持ち合わせていない。代わりに……だろうか？ その瞳の奥には、行けどもゆけども闇しかなかった。

男は、盃に残っていた酒を一気に飲み干すと、小さく息を吐いた。その振る舞いは妙に艶めかしい。男が黒い目を向けた先、肘掛けに下ろされたたおやかな手の傍らで、得体の知れない生き物がいそいそと徳利を注いでいた。いや、生き物とは定義したくない。これは何かの外力で操られているのだ、と言われた方がよっぽど信憑性が高いような気がする。全長は、男の手のひらを少しばかり越す程度である。その身体は、半透明の濁ったゲル状の皮で包まれていた。見ようによつては五体にも見える一（ヒトデの類を五体と見なすのなら）。しかし、腕部と見られる部分には、指などもちろん存在せず、現在も徳利を抱えるようにして懸命に持ち上げている。断じて健気ではない。非常にシユールな光景だ。おや、よく観察すれば、頭部分にあたる突起に、胡麻粒を思わせる黒点が二つ埋め込まれている。どうやら周りの景色は認識できるようだ。何ともミステリアスなこの生命体には、他にも目を疑いたくなる奇怪な特徴が多々ある。しかし、幾分か癩に障るため割愛することにする。

ちなみに、呼び名はしもべとする。

さて、虹髪の男である。何杯目になるかも分からぬ盃を空にして、男は身体力を抜く。安楽椅子が前後へ絶妙に揺れ、男の眠気を助長する。おもむろに目蓋を閉ざすと、男はそのまま寝入ってしまった。すると、折りたたまれた赤い毛布がどこからともなく現れた。その下を見れば、例の白いのが六体揃って、頭上の布を支えていた。一致団結……とはいかないようである。しもべ達は、互いに威嚇したり蹴り合ったりしながら、苦心して毛布を男へかぶせ終わると再び散り散りになる。元より傍らにて酌をしていたしもべも、いつの間にか姿が見えなくなっている。静寂に包まれた世界の中心で、男は昏々と眠り続ける。なんとも幸せそうな寝顔である。

ところで、ここは一体何の空間なのだろうか。実を言うと、男が座す安楽椅子は、地面との接合点を持っていない。当たり前だ、地面がないのだから。そう、男は安楽椅子諸共、宙に浮いているのである。無重力空間……ではないのだろう。男が肩をもそもぞと動かしても、長髪の先が浮遊する事はないし、先ほどのしもべ達も、足らしきもので二足歩行を行っていた。もっともな証拠として、無重力空間ならば、安楽椅子は前後に揺れないはずだ。

意識を内から外へ向けてみよう。男の周りの景観は、これまた顎を落としそうになる程に神秘的だ。全面、時計で覆い尽くされているのである。一概に時計と言っても、その形態は実に多種多様。円盤に針が二本付いた、オーソドックスなものが多いか。水時計や日時計らしきものもある。珍妙な例を上げようとして、ぬらぬらとてかる触手の群れが目が付いた。尖端が等しく同角度で屈曲している事を考慮すると、その角度で時を計るのだろう。中々にユニークだ。他としては、巨大な小便小僧の水時計があった。像は透けており、目盛りが記してある。抱腹を通り越して、シニカルな笑みさえ浮かびそうだ。話が逸れた。兎にも角にも、時という相対的な概念を計測する数多の計器が、遙か彼方までも続いているのである。しかも、盤に記してある文字が皆違う。流麗な筆記体があれば、角張った硬

い綴りがその存在を主張する。それが皆、数字を表すかどうかは定かではない。

また更に、言及すべき点としては、現在それらの活動が全て停止している事が上げられる。

どうやら、この場を理解する為には既存の法則を、一旦意識の底から引き剥がさなければいけないようだ。そうせずには、この場を理解することなどの到底不可能だと思われる。そうだ、まさしく常軌を逸している。考えてもみればいい。この空間もさることながらこの男も怪しい。止まった時計に囲まれて、穏やかな寝息を立てている、この酔狂極まりない男は一体何者なのだ。そもそも人間の容貌をしているが、擬態しているだけではないのか。そうだ、先ほどまでいた白い生命体、しもべは何処へ消えたのだ。

ちっ ちっ ちっ ちっ

際限なく膨らむ疑念に終止符を打ったのは、秒針の立てるそんな規則的な音。音源の位置は、男の左手だった。正確に言うと、太腿と左手の平の狭間より鳴り響いている。長衣に包まれた身体がびくりと揺れた。男は緩慢な動作で左手をひっくり返す。握られていた物は、金色の装飾が照り輝く、年期を感じさせる懐中時計。一本の線を思わせる秒針が、内部の歯車につられ時を刻んでゆく。廻りだした時計に連動して、思念の送受信がいつせいに始まる。

“定刻”ダ、ヤダナア

“定刻”ジャ、ハタラカナケレバ。ウゴクゾオマエラ

“定刻”ニナツタヨ、ナマケテンジャネエ、ウマノクソヤロウ

オヤ、“定刻”カ、ミナノシユウ、オレニツイテコイ

ウルセエ、テメエハサイコウビデ、サルノケツデモナメテロ

ソナナコトヨリ“定刻”ナンダゾ、オブツドモ、セイシユク

ニシロ

そんな協調性の欠片もないやり取りと共に、浮遊する時計の陰という陰から、大勢のしもべ達が、ぬらりと這い出てくる。生理的に身震いを押さえきれない。早速、殴り合い蹴り合いが多発している

のは、ご愛敬と断定してよいのだろうか？

と、そんな光景を引き裂くように飛来したのは、輝く純白の流れ星。その軌跡には、白い残光が尾を引く。一瞬の後、それは数多い円盤形の時計、その一つへとまっしぐらに突っ込んだ。眩い閃光が四方に散る。それは、動力を手に入れたと同義なのだろうか？ 驚くことに、黒金の針が動き始めたのだ。それを合図とするように、光は次々に数を増してゆく。各々が、各自一つの時計を目指して突き進んでゆく。目を擦り、漫然とその風景を観察することで、ようやく男の意識は覚醒する。

「ああ、“定刻”か」

そう呟く彼は、しかし立ち上がる気配を見せない。それどころか、またもやしもべに酌をさせている。盃をぐいっと煽り、やはりふうと息を吐く。視界を覆い尽くさんばかりの光の乱舞に、男の髪色は瞬く間も与えられず、移り代わってゆく。

一方、しもべ達である。彼らが這い出てきた事には、確固たる理由があるらしい。一つの個体がのしのしと、先ほど光を吸収した円盤の時計の元へ歩んでゆく。そしてなんと、その白濁色の双腕が、盤に突き刺さり、内部よりメラメラと燃える塊を引きずり出したではないか。同時に、時計の針が再び止まってしまふ。炎塊を抱えたしもべは、それを身体の中へと 限界まで胸部に押しつけられた炎塊が、にゅぼつと入っていく 取り込んだ。随分と苦しそうだのたうち回っている。取り込まれた方も、しもべの内部で暴れ狂っている――（メクソヤロウガ、アバレンジャ……ネエ！）。しかし、弾性を持つしもべの皮膚は、容易に突き破れるわけではない。よって元より生えている五本の突起の他、六本目が現れるという。……突き破られて、構成物をぶち撒けないことを切に願う。

しばらく後、炎塊の動きが嘘のように止まった。するとしもべは四つん這いになり、頭部らしき突起の尖端から、ぶしゃあつと勢いよく炎塊を吹き出した。さながら、水を吹き掛ける象である。炎塊はやはり光の尾を引きながら――（光量が上がっている気がする）ど

こかへ飛び去る。

残されたしもべの身体には、毒々しい変化が起きていた。皮膚上を、浮き出た血管を思わせるどす黒い線が覆っているのである。しばらく後、それは急速に消失したが、しもべは体調がよろしくないらしい。しかし、身体を引き摺りながらも別の時計へと向かう。

この個体だけではない。他の個体も皆揃って同様の行為を行っている。

カー！ ヤッパリマジナーオイ！

コイツナンテヘドロノアジガスルゼ！

ヘドロオ？ アマイゾ、コッチハウジムシニ、ハイズリマワ

ラレテイルキブンジャ！

ヤメテエ、コンナシゴトゼツテエヤメテヤル……

ジャー、ムニカエルンダナ、ギャハハハ、ハッ、ハッ……オ

エッ！

行く光、来る光とが入り乱れた幻想的な光景を、男は無気力に眺め、盃を無意味に空にしている。一体この男は何の為に、この場でこうして酒を飲んでいるのだろうか。疑問の答えは、しもべが教えてくれた。

監察官様、お電話です

そう言いながら、しもべは恭しい態度で黒電話を取り出した。回線がない事については、もう言及をしない。なるほど、男はこの空間の…… 監察官なのだそうだ。監察対象は、眼前の生命体で間違いなさそうだ。

しかし、なぜだろうか。男に受話器を差し出すこの個体だけは、言葉の吐き出し方が美しい気がする。

男は、徐に黒塗りの受話器を耳に当てた。

「お待たせしました。お電話かわりました。こちら監察官です。はい、あっ、そう……ですか。時刻は？ まもなくですね。分かりました。ありがとうございます。では、失礼いたします」

がちゃん

受話器を戻した男は、深々と重いため息を吐くと、無意識に頭がしがしと掻いた。髪色の変化が著しい。

失礼ながら。いかがなされたのでしょうか？

「ああ、また自ら命を絶ったようだね。あの馬鹿」

『あの』といいますと、例の……？

「そうだ。やはり私の創った魂は、必ず何らかの欠陥を抱えてしまふ運命にあるようだ。しかし、いくら何でも過剰な征服欲と自殺癖は出来過ぎだろうに」

半ば自嘲気味に笑う『上司』をしもべは慰める。

「ありがとう。そう言ってもらうと嬉しいよ。ふう……」

しばし考え込むように額に手をあて、男は言う。

「決めた。次を最後の機会としようじゃないか。最悪の場合、奴には墮落してもらふことにするよ。もちろん私としては、『掃き溜め』で最後まで足掻いて欲しいが……。おや、馬鹿息子のご到着だね」

言下に、男の頭上を異色を放つ炎塊が通り過ぎてゆく。煉獄を想起させる紅蓮色である。それは暴れ馬の如く蛇行しながらも、手前の鳩時計に衝突し火花を散らせた。凍った時が、動き出す。

男は颯爽と立ち上がると、一直線に鳩時計へ向かう。その合間にも、男の口からは、残酷な宣告が紡がれてゆく。

「これまでに輪廻転生を経験する事99回。貴様は貰い受けた生を全うする事なく、その生涯全てを自害にて終演としてきた。そんな貴様に再度輪廻の機会を与えるなど、もはや愚行の境地と言えよう。弁解の余地など与えない。親子の一好よしみだ。この私が直々に問おう。選択肢は二つ、選べ息子よ。一つはこのまま、この住人として時空に捕らわれ、汚物を引き受ける怪異となり下がる事、もう一つは、愚劣な魂の掃き溜めへと、最後の転生を行うか。」

男は鳩時計の前に立つと、しもべと同様の手口で、紅蓮の炎塊を引きずり出した。

拳大の炎塊をむんずと掴み、眉一つ動かさずに顔を近づける。

「さあ選べー！」

男は炎塊を手放すと、両手を優美に広げた。

己に審判を下すものは、己。

炎塊はその場で小さく旋回すると、猛スピードで下方へと消えていった。

その残り火すら見えなくなると、男は傍らのしもべに同胞への言伝を依頼し、自身は安楽椅子へと座り込んだ。

「果たして、奴はあの世界で『鍵』を手に入れられるだろうか。どう思う？」

問いに対し、受話器に手を伸ばしていたしもべは、少々身を縮めつつ、こう言う。

僭越ながら申し上げますと、それより掃き溜めの心配をなされた方がよいかと……

「……ははっ。まさしく。奴はきつと馬鹿をやらかす。場合によっては一つの文明が滅ぶかもしれない。まったくもってだ。息子とは言え、とても手に負えん奴だよ」

黒電話が繋がった。しもべは、受話器を両手で抱え込み、何やらこそこそと話し込んでいる。しかし、電話先の相手は、しもべの話を聞こうともしないようだ。堪えきれず、しもべは電話口に向かって激しく怒鳴りちらした。

……迫り来る光の束に気付かずに。

乏しい表情を精一杯歪め、胡麻のような眼を閉じ、しもべは嘆息する。虹髪の男は安楽椅子に深く身を預け、意識を手放していた。その他のしもべ達は、身を焦がす不快の嵐に耐えるべく、周りになど注意を払っていなかった。

だから誰もが気付かなかった。

頭上の彼方より幾筋もの炎塊が、雷光の如く墮ちてゆく様を、誰もが視認出来なかった。

つー　つー

通信が途切れた。会話の途中で、意図せずに本性の片鱗を晒してしまっただしもべは、さり気なく辺りを見渡し、少々バツが悪そうに

ごほんと咳をする。その後、凜々しい足取りで、胸部を不自然に張り、男の傍へ戻ってゆく。
きつといつも通りの風景なのだ。

第三話 収監と裏切り

(計画は失敗した)

その言葉だけが、少女の頭の中に幾度となく再生されていた。

後ろ手に黒光りする鋼鉄製の手枷を填められた少女は、黒のローブを纏う男達に囲まれている。誰もが無言。乱雑な足音のみが、停滞する空気を震わせている。闇に万事を飲み込まれた地下通路を、数人の男と一人の少女は進んでゆく。いや、少女の場合、進まされていると言った方が正確だった。

集団の先頭を担う男は、歩きながらも、右手に掴んだこつた造りの杖を前方斜め上へ真っ直ぐに伸ばしていた。どす黒い何かで塗りつぶされた(もしくは染色された)木製の杖。掲げられたその杖の先には、赤々しい炎が灯っている。しかし、炎の中に燃焼中のはずの物体の影はない。杖自体も燃えてはいない。ただただ、炎だけが四方に光を散らすのみ。

『魔術』による明かりだ。

照らされた少女の頸部は、複雑な紋様を刻まれた首輪によってきつく締め付けられていた。こちらは、体内へのマナの吸入を妨害する『呪術』である。少女にとって、これほど忌々しい存在と言ったらなかった。首輪に接続された三本の鉄製の鎖の先は、枝分かれして男達の黒い懐に吸い込まれていた。面白いほど嚴重な態勢である。暗に、少女に対して鎖一本では心許ないとも言っているかのようだ。この光景を目撃すれば、誰だって皆「大袈裟だ」と口を揃えて言うはずだ。しかしそれは、何も知らない人間が、ただ現状をありのままに捉えて口にした無責任な狂言に過ぎない。男達を臆病者と見くびる人間の、ただの戯れ言に過ぎない。この少女の内奥に秘められた、語るに恐ろしい『力』を知る男達が、いくら呪術で『力』を封じているとは言え、こうしてその怪物をなよなよしい鎖のみで連行する行為は、実を言えば、眠れる悪竜の鱗に覆われた堅牢な

巨体に無防備に突進してゆく、そんな蛮行と大差ないものなのだから。

少女が、ゆっくりと顔を上げた。小さな輪郭に縁取られた、かなり整った容貌が現れた。しかし、暗中の炎による陰影のせいなのか、それとも少女の心情が表に出ているのか、どちらにせよ、少女はひどくやつれて見えた。老け込みようが早老と見違うほどだった。

少女の視線の先に、華美な装飾を施された両開きの鉄扉がそびえていた。鉄扉の表面で、見る者に畏怖の感情を植え付ける醜悪な面構えの竜が、今にも平面の世界から飛び立とうと両翼を羽ばたかせている。扉の存在は、この地下通路の終点を意味していた。薄暗いこの場でははっきりと確認はできないが、酒樽をあおり火を吹く鬼の彫刻が二つ、両の壁際を陣取っている。少女は形の良い眉をひそめた。

(あんなもの、前まで置いてあったかな……)

松明を所持した男が、ぶつぶつと何かを呟く。すると、鉄扉が惱ましげな音を立てて、のろのろと、しかし確実に開き始めた。その一秒一瞬が少女を確実に飲み込んでゆく。中央の隙間より徐々に露わになるはずの扉の先の空間も、これまでと同じく濃密な闇に閉ざされていた。

扉は完全に開いた。少女の目が、若干恐怖にちらついた。

少女は改めて身を振り乱し、扉の先へ進むことを激しく拒否した。しかし、何人もの男に力で勝る道理はなく、やがて観念したように全く反抗しなくなった。後方に扉の閉まる音を背にし、先頭の男がぶつぶつと何やら呟いた。たちまち灯りが消え、再び闇が息を吹き返す。少女の視界に炎の名残が白い靄として、いつまでも残留していた。河原の土手で彼と二人、仲良く仰いだ最後の花火が思い起こされた。やけに懐かしかった。色あせない記憶の欠片を掴もうと、自分も知らないどこかへ手を伸ばしかけて、手枷が少女を現実に引き留めた。

鎖をぐいと引かれた。数歩進めば段差があつて、上った後、少

女は立ち止まった。

「被告人」

虚空の彼方より、声が少女の名を呼ぶ。低温の耳障りな男声である。

しかし、少女は告げられた意味を解せない。

恐らくは少女の罪状であるうものが、『異国』の言葉で淡々と読み上げられてゆく。そこに少女が口を挟む事は許可されていない。と、言うより、例え異議を唱える事を許されていても、相手が少女の言葉を理解できない。彼女はそこにいないも同然の扱いである。

(『裁判』ね)

少女は声をはり上げ指を差し、これらのものを嘲笑いたい衝動に駆られた。しかし、それは強がりではない。誰かもしくは何かを貶めることにより、外皮だけのがらんどろな愉悦に浸り、無様な自分の姿を一瞬でも脳内から排除しようとする魂胆なのだ。少女は、己に情けない気持ちにさせられた。私はここまで落ちたのか、と。顔を上に向ける。

夜空に浮かぶ星々と言えば聞こえはいいが、実際はそんなものではない。濁り荒んだ瞳の光が、闇の中に並び浮かび上がり、彼女を上から見下している。その視線は侮蔑の感情にぬらついでいて、闇の中でも構いなく可視できるのでは、と思わせるほどだった。以前、少女はこの法廷を訪れた事がある。記憶が確かならば、上階は傍聴席となっていたはずだ。とは言え当然ながら、彼女の知人の中には、傍聴席に座れる身分の者はいない。裁判を傍聴できる者は貴族、もしくは貴族に繋がりを持つ大商人に限定されている。更に言えば、仲間達は今頃続々と死刑になっているか、王の犬共の牙に恐々としながらも、国外逃亡を目論んでいるはずだ。そのような状態で、少女を助けることなど、誰も考えつかないだろう。

もはや一縷の望みもない。計画は失敗に終わったのだから。

言つなれば、これは消化試合なのだ。勝負はとうの昔についている。

そんなことは、少女自身が一番理解していた。

(人でなし共めっ)

少女は内で唾棄し、上を睨め付け呪い文句まで吐いた。

しかし、状況は絶対的に不利である。少女の相棒を務めた使い魔ファミリアは、想像したくはないが、十中八九研究部に回されたのだから、首輪に刻まれた解呪不能の術式により、『マナ』の精製もままならず、魔術の行使など夢のまた夢だ。

少女は、絶海の孤島に一人佇む己の儂げな幻影を、自分の中に見た。自身から溢れ出した感情は、やがて海に交じり潮のように島の周りを侵食してゆく。少女は再び俯いた。その表情はまるで、絞首台へと赴く罪人のようである。まあ、同じような境遇ではある。いずれ時は満潮を迎え、心の足置き場を失った少女は、溺れ、藻屑となり果て崩壊するのだ。

少女は自嘲気味に、それを受け入れるほかなかった。

(私さ、本当にあそこで霧散するのかな。まだ、鍵を見つけていないのに)

いつしか、頬が濡れていた。

少女は、誰かの名を呼んだ。余りに遠い世界に、そのつぶやきは届きそうもない。

(約束、守れなくてごめんね……)

それでも『裁判』は進んでゆく。

豪華な椅子に座り込む彼の目の前に、ベルが鳴っている電話があった。

受話器を取れば、なめらかな女声が聞こえた。

「報告します。アダマント城内地下三階の研究部にて、異邦者を主とする使い魔ファミリア、識別名サムエルを保護。ご指示通り、偽装死の手はずも完了しました。異邦者は有罪判決後、やはり浮遊城へ飛ばされ

たようです。申し開きできません。傍聴者を装い侵入した部下によれば、法廷内には幾重にも『呪術』が重ねがけしてあり、安易に手が出せる状況ではなく……あわよくば奪還を、とは思いましたが、場を荒げるのはいかなものかと躊躇し、結果見過ごしてしまつたようです」

「いやいや、ご苦労だよ。王に感づかれてはこちらも動きにくくなる。うん、いいか。これは他のやつらにもしつかりと伝える。無理に命令を遂行する必要はないんだ。隠密を前提、敵にはちらつく尻尾の影すら踏ませるな。絶対要塞に飛ばされては、あちらも楽に手出しは出来ないだろうから、その異邦者の存命は約束されたようなものだ。手出し出来てもらっては困る。今は天がこちらに微笑むよう祈るのみだよ」

「今後の方針といたしましては……」

「すまないがそういうのは嫌いでね。分かったことを口にするなよ」
「申し訳ありません。引き続き、浮遊城の搜索にあたります」

電話を置く。

再び、電話が鳴る。電話越しに、焦りがそのまま伝わってくるような声が聞こえる。

「か、かしらっ、大変ですっ。ったく、ポカやりやがってあの大馬鹿やろう共っ！」

「落ち着けよ。何があつたのか説明しろ」

「はっ、はい……。報告です。今から三分前に、『感知器』の操作を任されていた第八部隊が青龍の大群に襲撃されたみたいで。通信具も依然黙りこくつたまま。恐らくは、テリトリーを侵した……何つつつか、音波でしたっけ？ とにかくやつら、きつと逆探知とかいづのをされたんすよ。情けないけど、俺あ隊長つっても馬鹿だから、今はかしらの指示を仰がせてもらいたいんです」

「ふう……。お前、頭を冷やしてよく考えてみる。繁殖期を過ぎたこの季節だぞ？ ブルードラゴンの『大群』が『偶然』にも、第八部隊を襲うわけがないだろうに」

「あえっ」

「撤退しろ。これは命令だ。定かではないが、あちらに相当やり手の魔術師か、高ランクの使い魔が紛れている可能性がある。第八部隊を壊滅させるほどの勢力なんだろう？ これ以上は無駄足だよ。事前に話してやったはずだ。今回の作戦は、失敗したから次はないというものではないのだから。最大限に上空を警戒しつつ、第二部隊は速やかに拠点へと帰還しろ。やつらとの交戦を回避。今のうちから、出費消費は出来るだけ控えた方がいい」

電話が切れた。舌打ちをした。

（やつら、いずれ感知器の技術を復元するだろうか。いや、それはないか。やつらはあるの解呪法を手に入れてはいないはずだ。本体は、今どこにあるだろう。可能なら取り戻したいが。それともやつら、プレスで見境なく機械ごと凍り付かしてしまったのだろうか）

溜息を吐いた。

（どちらにしろ、あれは安いものではなかったのだがな）

苛立ちは再度、外に音として現れる。

彼は振り向こうとし……

「舌打ちはよくなってよ。こんな陰気くさいところにばっかりいるから、苛々するのよ」

どこともしれぬ場所から響いた声に、彼は思わず派手に咳き込みそうになった。不意を突かれた心臓が、のど元にまで突き上がったように思える。

さつと目を向ければ、室内を斜めに走る影が、『二つ』仲良く揺れていた。

「お、おはようございます。それはこっちのセリフですよ。姉さん。まったく人が悪いなあ。帰るんだったら前もって連絡をしてくれればいいのに。……えっ？ あっ、ああ。なあに。早めの『スタートダッシュ』がばれてしまっただけです。フライングは厳禁だと、部下の身をもって思い知らされましてね」

「ふーん。まあいいわ」

彼は現状をありのまま、誇張せずに彼女に伝えた。

「んー、わかったわ。……それでっ」

身を乗り出す彼女。彼は部屋の隅へ泳ぎ出そうとする視線の先を、意志を総動員してがっちりと前方に固定した。彼女の息が耳元に熱い。彼の背中は今も尚、凍り付いているというのに。脊椎がそっくりそのまま氷柱にすり替わりでもしたようだった。

「計画に支障はないのでしょうか……ね？」

一拍後、彼は答えた。口元はどうなっていたのだろうか。声が震えていないのは確かだが。

「ない、とは言いきれません。しかし、この程度は誤差の範囲です。元々綿密にたてた計画ではありませんし、まだ先は長い。臨機応変が僕の売りですからね。楽しみはここからです。第八部隊は潰されましたが、こちらだって先日あちらの主力を大分削っている。犠牲がもたらしたカードを一枚確認出来たことだし」

彼女は蛇のように舌をちろちろと出して微笑むと、するすると離れていく。

「ああ、ただ……」彼はそれらしく語尾を小さくした。

「何かしら？ 気になることでも？」彼女が問う。

「ええ、浮遊城の件ですよ。あつ、もちろん偽物のほうですよ？」

長年、特に気にしていませんでしたが、ここのとこあのでか物は何かきな臭い。今回だってそうだ。あの王が、未だに罪人を『御上』に献上している事が気がりです。王制を敷く絶対権力者が、反逆者を自らの手で裁かないなど考えられましようか。それだけじゃない。今回捧げられた女は、異邦者でありながらこの世界でも十指の一に入る規格外の魔術師だった。彼女に与えられた『呪い』の本質を知らぬとは言え、それだけ戦力的に魅力を持つ異邦者を、王は自らのしもべともしなかつた。本当に何もせずに、ただ上への貢ぎ物としただけだったんです。その気になれば、彼女を操り人形にする事は容易かつたはずなのに。王の側近には、その手の術式を扱える輩など、掃いて捨てるほどいるでしょうからね」

彼女はしばらく物思いにふけた。

「つーつと冷や汗がたれた。気取られないよう必死だった。

「……わかったわ。こちらで本腰を入れて調査するべきかしら？」

「お願いしたいところですね」

「了解。やる気は出ないけどね。はあ。早々に彼、彼女らご対面したいものね。あとのくらいなのかしら？」

「解読された予言の書では、姉さんの望みの『あの』呪いが落ちてくるのは、二百年後と記されていますから。最短二百年、長くても五百年、その間には蹴りがつきそうです。その呪い持ちだけは間違っても死なぬよう尽力しますよ。あの忌々しいやつらと互いに、ね。最終的に争奪戦になる事は誰の目からも明白ですが」

「ふふつ。あいつらも馬鹿よね。私たちに喧嘩を売るようなマネをして、ただで済むと思っっているのかしら。ん。二百年かあ。まだまだ時間がかかりそうね。私、もしかしたらその間に『鍵』を見つけちゃうかもしれないわ」

軽口を叩いた彼女の視線。

突き刺さる二針の冷たさが、彼をその場に縫い止める。

「信頼してるわよ？ 宗主様？」

彼女は甲高い足音を従えて去ってゆく。他の追隨を許さない魔の世界における絶対の君臨者。その後ろ姿だけでも、実力の程が知れるようだった。彼女は歩く。知ってか知らないでか、後方の松明二ヶによって照らされる室内で、彼の心を写すかのように揺れる細長いしかし濃い影の一本を、一步一步これ見よがしに踏みつけながら。

『彼ら』は震えていた。

彼女が注意を払う様子はなかった。気づかなかったはずだ。

床に張り付く影の本数が一本多かったことになど。

彼女が何事かつぶやいた。続いて、彼女が腰の辺りをねじるように身体を捻る。すると室内に淀んだ空気がうねりをあげた。まるで、部屋という空間が丸ごと彼女の奇怪な動作に引きずられたようだった。引き起こされた烈風は、室内を縦横無尽に駆け巡る。松明は揺

れ、室内の影という影が壁や床面の上で触手のように蠢いた。しかし、暴風が一樣に彼女を喰らおうと足を揃えて一点に収束した時には、彼女の肉体は既に虚空へ吸い込まれていた。塵一つ残さなかった。

『彼ら』はほつつと息を吐いた。

第四話 転生

『英雄とは時にひよんな出来事で、話にも上らぬ辺境の地で誕生するものです。彼の場合も違わなかった。晴天の下、白く輝く太陽が遙か上空へと駆け上がる、そんな夏のことだったのです。成長し青年となった彼は、『選民』を指差しこう言いました。『あの叡智は汚れている』と……。人々は気付くよしもなかった。誰もが気付きませんでした。でも、それはまさしく神の御言葉だったのです。彼はいつしか神の代弁者となっていました……』

神話研究家

リーマン・ホーキン博士の著書『崩れ去りし旧世界』より一部抜粋

降りしきる雨が、鬱蒼と生い茂る木々の葉を盛んに叩く。

もうすぐ太陽が真上に上がる時間帯だというのに、貪欲に成長を続け層のように折り重なった樹冠も相まって、薄気味の悪い暗闇が森を閉ざしてしまっている。純白の花弁へ誘われるようにと赴いた一匹の蛾が、下に降り下がっていた壺状の袋へと捕食された。地を覆う濃緑の草はさながら生える剣のように先端を鋭く尖らせており、またその背丈も優に一般男性の腰の位置を上回っていた。周囲には人の胸ほどもある巨木が乱立し、その皺だらけの茶色の肌に巻き付く暗色のツタや、深々と刻まれた、爪痕……？らが、怪しげな雰囲気に拍車を掛けていた。

察するに、ここら一帯には人為の力が及んでいないようだった。

もしや人跡未踏の地なのでは、と、そう思えばたちまち想像は裏切られる。

緑色の海に溺れるが如く、一人の少年がぬかるんだ地に胸腹を埋め、倒れ込んでいた。肩まで伸びた黒髪が乱れに乱れている。

少年はなぜか一切の衣類を身にまといなかつた。見渡すもその手の物は投げ捨てられてはいない。しかし剥き出しの四肢からその体幹まで、擦り傷切り傷の類は見当たらず、寧ろ健康的と思えるほどに艶やかだ。

おかしい。

この森の不気味さを差し置いたとしても、少年の存在は圧倒的に不自然だった。

草を掻き分けてここで力尽きたとするならば、少年の身体には一つや二つの切り傷があつて然るべきだ。というより、彼の周りには草をなぎ倒した形跡など皆無である。彼はいかなる手段を用いてこの場へ到達したのだろうか。上か。枝の上で猿の真似事でもして、間抜けにも足を滑らせたというのか。まさか、だ。現実性がなさ過ぎる。

そもそも、彼は誰なのだろうか。

思い立ち、片頬を泥に汚している顔を覗き込めば、驚愕の事実を目の当たりにする。

小さな輪郭に縁取られ、筋の通った鼻を中心とする端正な顔立ち。幼さが特徴とも言えるその眠り顔は、豪雨の中マンションの二十階より身投げを行ったあの少年に　つまりは、楠木奈々人に顔の細部に至るまでまさしく瓜二つだった。同一人物としか考えられない。

しかしあの時、彼は確かに血を撒き散らせ死んだはずである。割れた頭蓋に血溜まりを見つめる虚ろな瞳。幾多の住人に悲鳴を上げさせトラウマを植え付けたその亡骸は、無機質なブルーシートに隠され、安置所へと運ばれたのだ。

これらの事象を集約して、導き出されるものはあるのか。

問われれば、あると答えることが出来る。

ただし、この世界の住人ならば、という限定付きではあるが。

つまり彼は……

時間の経過に順い、頭上の灰色の層より溢水する水量は徐々に増加してゆく。

倒れ伏す彼は最初、己の中に自我を是認した。

混濁する意識の元で僅かな思考を取り戻す。続いて作動する器官は聴覚。彼の脳内にノイズ音が反響するのは、雨音を誤聴している為だと思われる。それに、鼓膜を打つ律動的なこの音は……。彼はこの時なぜか近くで時計の秒針が廻っているのだと、そう誤解し、これまたなぜか彼の意識は柔らかな安堵に包まれた。

大分時間を要して、彼はその音が胸から響く鼓動なのだと認識した。

すると弱々しい思考の片隅より、ふと、もしや自分は生存しているのでは、という疑念が鎌首をもたげた。

それは得も言われぬ恐怖となり、瞬く間に彼を圧迫する。

（本当に死に損ねたのか？ 二十一階から落ちて？ 馬鹿な！？
だが心臓は動いている。戻るのか？ あそこへ。もう安住の地なんて存在しないのに。俺は何処へ連行される？ 警察か？ その後……いや、その前に精神病院か？ またかまたなのか！ あんな上辺だけの検査で他人を理解したつもりになって愉悦に入る白衣の大人達と共に、またもや閉じこめられるって言うのか。ふざけるな！
そうだ生きているのならばもう一度死ねばいい。やる、俺はやってやる。奴らの目を盗み、呆気なく死んでやる。死んでやる死んでやる死んでやる……。いや、まさかっ。馬鹿な事を考える。奴らの目など盗めるものか。何時だって、監視を続けるあの憎々しい黒光りのカメラが、きっと俺を邪魔するに決まっている。そうに決まっている。では、死ねない。死ねないぞ。どうしたって、死にきれない。さて、俺は何年に間束縛され、そして生き存える？ 嫌だ嫌だよ！
なんで社会は、意味の無い『生』なんかをこぞって俺に強要するんだ！ もういつそのことっ………！）

彼は自我の内側で発狂した。

殺せ殺してくれと、呪詛のように意識の内部で咽び泣く。

彼が若干の冷静さを取り戻す為に、天を覆う分厚い雨雲が蓄えた水滴を余すところなく絞り尽くしてしまう程だった。薄く棚引く朱色のそれが、時の経過を指し示す。とは言え、巨木によるアーケードは相も変わらず陽光を遮り、森は一色、黒が濃厚になるのを待つのみである。

叫び苛立ち恐れ僻み負の感情を爆発させた彼は、少しだけ前向きにものを捉える事が出来るようになった。胸に希望の種を見いだせた。

そう。彼が生きているとは限らないのである。

この世界が死後の世界ではないか、と彼は推察し始めていた。

彼は自身が未だに外界を確認していない事を支柱とし、この発想を蔓の如く絡み付かせ大切に育む。言い換えれば希望である。

さあ、花を咲かすにはあと一歩。手足は動きそうにもない。というより感覚がないのだ。雨音。確かあの時も降っていたはずだ。故に判断材料にはなりそうもない。匂いだってその雨にかき消されてしまっている。残るは一つ。彼は全精力を傾けて、眼球を塞ぐ目蓋をこじ開けた。

(みど……り?)

焦点が合わず、歪む視界に写った黒緑色を辛うじて草だと判別する。左方に見えるのは地面であろう。脳の回転数が上がるにつれ、外観に立ちこめる靄が消失してゆく。しかし、完全に回復するにはまだ時間が掛かりそうだ。

立ち上がる事も試みて、両手両足はやはり動かさず失敗に終わる。いくら電気信号を送っても、反応する気配すら見せない。もし動かしても立ち上がる事は困難だったであろう。意味をなさない三半規管のせいで、上下左右の判別に狂いが生じている。彼は俯せに寝ているのにも拘わらず、背中側に引っ張られていると錯覚した。

頑として動かぬ身体に見切りを付け、彼は自身の境遇に思いを巡らせる。彼が着地した地点には、人工のアスファルトが敷き詰められていたはず。誰か自分を発見した人物がこんな山林に放りだした

？ そんな事件は、小説でしか起こり得ない。小説は現実よりも奇なのだ。まったくこの馬鹿が間違えたのか。それはともかく……
(現世じゃ……ない！)

彼は、その事実フィクションに小躍りしそうになった。既に陽はほとんど隠れ、先程まで識別のできたものは悉く闇に飲まれてしまっている。眼前の草も例外ではない。せつかく鮮明になった視覚も、あつと言う間に役に立たなくなってしまうた。だが彼は構わない。開いた花びらを大層に愛でつつ、意識の中では満面の笑みだった。

藪の中より二つの眼光が彼を射抜いているとはつゆ知らずに。

しばらく後。興奮も冷めた頃。

一向に言う事を聞かない身体が、少しだけ感覚を取り戻して来る。頭上の葉より滴る雫に打たれ続けた結果、彼の裸体はすっかり冷え切っていた。

(ん……?)

不意に、重々しくも透明感のある声が彼の頭に響きだした。男声女声からなる、なんとも荘厳な合唱である。その絶妙な協和音は、生まれてこの方聞いた事の無い音声で、得も言われぬ神妙さを持ち合わせていた。しかし彼が聞き惚れる事は無い。それどころか表情で嫌悪感を示したほどである。

時間を置いて徐々に音量を増すそれは、いつしか彼の脳内を占領する。彼は気付いた。歌声は、同じ節を何度も何度も繰り返している。まるで、頭の裏側にその調べを強引に塗り込もうとでもするように。内側から自我を改変されているようで、気味が悪かった。それだけではない。彼は胸の内に小さな違和感を覚えていた。

結局、歌声は前触れも無く煙のように消えていった。

しかし、抱えた違和感は消えてはくれない。取り戻した静けさが、今は逆に恐ろしい。

心の底で何か溶解するような、そんなイメージが頭に浮かんだ。焦りと恐怖に身が強張り、彼の冷たい裸体は、まるで結露でもし

たかのように、玉の汗にびっしりと覆われていた。

(何だ、何が起こっている?)

北風に流された雲の間から、紅い満月が妖しく顔を覗かせる。

蠢く不快感はやがて激痛となりかわり、本格的に彼の全身を蝕み始めた。

それは身体感覚が研ぎ澄まされるに比例して、順調に、むくむくと肥大していった。熱い。暑いのではなく、熱いのだ。血管の内부를燃えている糸状の蛔虫にでも巡られているようにしか思えない。唯一見える肩口の血管が、ぶくぶくと膨張しているのを視認する。実際、自分の血液は沸騰しているのではないか? 今にも気化した。それが皮膚を裂けて噴出するようで、彼は気が気でなかった。特に胸の辺りがやたらと熱いのは、心臓が廻ってきた灼熱の液体を偏ひんに受け付けているからだろうか。

文字通り焼け付く痛みに身を焦がし、彼は声にならない叫びを上げる。

指くらいは動かせるようにはなったが、未だ尚、四肢には力が入らず、彼の暴力的欲望。この場で暴れ回りたいという渴望は、行き場を無くし再び彼の内部で荒れ狂った。心の堤防が決壊しないのが不思議なくらいだ。はち切れんばかりに膨張した緑色の静脈が彼の裸体を隈無く包み込む様子は、まるで彼が狡猾なツタの悪魔にでも拘束されたようである。

彼はもう、どうにかなりそうだった。

(これが、地獄ってやつなのか……?)

四肢体幹だけではない。血管は脳にこそ深く根付いているものだ。彼は、想像することを全力で拒否した。眼下で起こっている現象は、脳内においても当てはまるのだろう。激烈な頭痛は波のように時間を置いて迫って来る。視界が真っ赤に彩られる。彼はそれを誤解し、毛細血管が破れ瞳が紅に染め上げられた自分を、自分の中に作り出す。

この状態はいつまで続くのか。

彼には、内に暴れる激痛より逃れる術すべがない。

これが噂に聞く地獄と言う奴なのだとすれば、永劫、これが継続するのか。それとも自我が崩壊するまでだろうか。裁きの劫火に燃やされて、『この』自我が灰燼と化すのか。消滅と再生、もしかこれが輪廻転生の実態か？

紅に染まる視界と白光に支配された脳裏。

何も考えられない何も思い出せない。

彼は憔悴し、この場に来て二度目の絶望に飲み込まれてゆく。

苦痛もいよいよ我慢の限界に近づいた時のこと、定かではないが、おそらく胸の辺りではないか。彼は、ぶしゅつという音を耳にした。臨界点を越え鮮血が霧のように吹き出したのだと、彼は朦朧とするしゅつ思った。

この感じは二度目だった。身体が抜け殻となってゆく。

彼は皮肉を覚えた。死後の世界でこの感覚を再び味わう事となるうとは、と。

前回の相違点は、それが終末と解放ではないこと。彼が意識を手放し落ちてゆけば、反比例するように痛覚が増す。落下点は煮えたぎる火口のご真ん中だともいうのか。しかし……。

また、死ぬのか。

ゆつくりと、彼の中で何かが断絶する。

彼の意識は闇に沈んでゆく。

闇の中に低い声が響き、仄かな光が空中に浮かんだ。一部始終に傍観を決め込み息を押し殺していた眼光の主が、長剣の一閃で手前の邪魔な草を難なく薙ぎ払い、下手すれば既に事切れているかも知れぬ彼に近寄っていった。健康的な体躯の男だった。男は、倒れ伏す少年の瘦躯を優しく反転させた。必然的に仰向けになった剥き出しの裸体が、光球に照らされ優しげな双眸に見下ろされた。その人

物の注目を集めたものは、少年の前腕の内に浮き上がった黒い刺青のような文字だった。

New world level 6

そのアルファベットと数の羅列に視線を留める。男はひたすらにじっと待った。頭上の葉から滑り落ちてきた豪雨の残滓が肌を打つても、夜風に吹かれた草木がざわざわと気味悪く笑っても、男は辛抱強く待ち続けた。その間、産毛一つなびかせなかった。

待ち望んでいたものが、遂に始まった。

それは唐突だった。刺青が、化学変化でも起きたかのように、左端の『N』から一気に侵食され紅に染まっていった。いかなる絵の具を用いても表現できない濃厚な妖しさを漂わすその色彩は、正確無比に人の血色を再現していた。

意味不明のその文字らに何を見出したのか。男は顎に手をやり何度も頷く。明かりに照らされた目尻が垂れ下がり、つり上がった口元には濃い陰影がついた。手の平とこすれる度に硬質な髭がじりじりと音を立てた。

男は粘り気の強い声で次のような意味の言葉を発した。

南西の離島、少年、黒髪、自殺。間違いないようだ。彼が予

言の……

しかしその満足そうな表情は、数秒も持たずに顔から強制的にぬぐい去られた。

遠吠えが聞こえた。しかし魔物の遠吠えにしては幾分甲高く、そして透き通り過ぎていた。森にあまねく響き渡る天を突かんばかりの悲痛の叫びは、男の肌を泡立たせ、震えは身体の芯まで浸透した。この鳥肌は恐怖による悪寒ではない。むしろ興奮によるものだった。沸騰せんとばかりに熱を帯びた感情が、男の体温を押し上げていた。男は知っている。この陰鬱な樹海にひっそりと暮らす呪われた天涯孤独の存在を。自らに化け物を背負い込んだ報われぬ少女の

伝説を。

堪えようと噛み締めた歯の隙間から、くつくつくつと笑いが飛び出た。男は一旦深呼吸をし高揚した気分を落ち着ける。さも愉快そうに、転がる少年と遠吠えのした方角を交互に見やった。口が開かれた。

しかし、本当にこんな辺境で生き存えていたとは。予言的中率は文句なしだ

周囲を照らしていた明かりが消滅する。男は膝を弛ませると、勢いよく巨木の枝へと飛び乗った。それは人間の所行とは思えぬほどの跳躍力で、実際、男は人間ではなかった。厚い木の葉の層を突き破り、夜空に点在する星々にその姿を確認された男は、器用に折りたたまれていた二つの翼を展開させる。背に接続された翼はそれぞれが腕の二倍ほどの横幅を誇り、全体が黒い羽毛にびっしりと覆われていた。黒インクから引き揚げたばかりのような光沢を見せる黒翼は、紅い月光を反射させ漆黒の美をまざまざと闇夜に見せつけていた。

翼がはためき始めた。力強くしなる翼によって掻き混ぜられた大気が葉腋を引きちぎり、眼下に広がる広大な森林を波立たせる。飛沫の代わりに大量の緑葉が月明かりの元で白光を放ち、くるくると宙を舞った。

百数年後、我々の子孫が御身を伺うことでしょう

男の顔に現れたものは何よりも固い決意の表情だった。一際強く翼を上下すると、切り裂かれた空気が金切り声を上げた。

男は飛んだ。重力に抗い優雅に飛行する。荒れ狂う気流の中で、その口だけがこう言っていた。

御身の存在を希望とし、我々も『もう一つの予言』を蹴散らせて見せましよう。我々はいかなる苦難があろうとも決して諦めません。一族揃って滅びの運命を受け入れるつもりはないのです

紅い月面にぽつんと浮かんだ黒点が、吸い込まれるように、消えた。

第五話 忌み子

『「早急にお答え願おう。こうしている最中にも、呪いは彼を蝕んでいるのだ！ 賢王よ、彼の目を覚まさせてやってくれ！ この偉大なる勇者は、進んで命を絶つべきか、それとも最後まで生を追い求め、万死の呪いすら解くというありもしない空想の泉にすぎるべきなのか！」王の応えて曰く「私はどちらも違うと考えます。彼は笑うべきなのです。呪いを神の贈り物と思いなさい。呪いの苦しみを打ち破る彼の英姿は、人々に希望を授け、そうやって世界は正しい方向へ巡ってゆくのだから」……この会話を引用するこの瞬間ですら、私は虫酸の走る身体を押さえるのに精一杯だ。なんとこの詭弁だろうか。私はこの言葉を是とする国民にもしばし啞然とした。どれほどの叡智を極めようと、やはり人間は人間でしかないらしい。

中略 つくづく思う。人間とは愚かな生き物だ。種族の中の個体は、種族その物の為に生まれてくるのか。断じて違う。私は私の為に生まれてくる。』 テキストブック『異種族』より

少女の華奢わしゃな肩口で、暗褐色の髪先が揺れている。

彼女はワンピースを着用していた。手足等、身体の線は細いが、その印象は決して弱々しさとは結びつかない。それは、彼女が生来所持している芯の強さが外面にまで浮き彫りになっているためかもしれないし、生まれ育った環境が自然とそんな雰囲気をもたせたのかもかもしれない。

色取り取りの小鳥とそのさえざりに包囲された彼女の意識は、手にした書物ただ一つに注がれていた。燦々と照りつける陽光は緑葉に柔らかく反射され、葉を透かした光がもたらす僅かな熱気を、東よりのそよ風が適当に吹き飛ばす。この情景だけを切り取れば随分

と快適な環境と言えたが、それは木陰という条件付きで、日なたの様子は全く別だった。直射日光は情け容赦なく大地の表面を焼け焦がせ、漂う空気に早くも夏の匂いを混じらせ始めていた。

彼女は幼少期より慣れ親しんだ巨木に背中を預け、その根元に腰を下ろしていた。足を前方に放り出し、緑色の日傘の元で俯く。彼女の視線が開かれた書物の右下端に行き着き、その度ページは捲られ、新たな情報が、古人の知恵が顔を見せた。

しばらくの間、彼女は読書にふける。誰の制止も受け入れず陽は悠々と昇っていった。

ふと、彼女は視線を上げた。

誰かがここへくる。そんな気がした。

彼女がゆるりと立ち上がれば、衣擦れの音がし、周りで羽安めをしていた小鳥達をいっせいに飛び立たせた。彼女はその様子をぼんやりと眺めた。

そこは、どこかうらぶれた空気を漂わす教会の敷地内だった。遠い昔に手入れを放棄された芝生はもはや雑草と同化して、日溜まりの下でざわざわとたゆたっている。背後の巨木他には、みずみずしい若木達がいくつも植えられていた。全て彼女が植えたものだった。彼女が右方へと目を向ければ、建築されてから大分歳をとったであろう白塗りの建物が鎮座している。

高い木製の扉に囲まれた土地の中部には、彼女のほか誰もいないはずだった。そもそもここは、彼女が人目をはばからずに過ごすために選んだ秘密の場所である。彼女だけの安息の時を知り得る人間は、指で数えられるほどしか覚えがない。

活版本をぱたと閉ざすと、彼女の視線は建物の角へ向けられた。……現れたのは旅装姿をした背の高い男だった。

自然と彼女の目尻が緩まった。

彼女の視線に気付いた男が「ソフィー」と彼女の真名を呼んだ。

「ロベルト兄さんっ。久しぶりねっ」

微笑む兄に彼女はそう言った。

ロベルト・イルジャーナ。イルジャーナ家の次男坊である。

ロベルトは胸に飛び込んできた妹の背中に手を回し、手触りのいい髪をくしゃくしゃと撫でてやった。二年ぶりの再会である。目の前の少女はロベルトの胸程の背丈であった。

「久方ぶりに屋敷に戻って見たら、待っていたのがしかめっ面の兄貴と母さんだけだったからさ。探しに来ちゃったよ。しかしまたここで本を読んでいるのか。付き人は？」

「まいたの」ソフィーはてへつと舌を出した。

「あんまりいいことじゃないな。とはいえ哀しいかな。過去の経験が足を引いて強く言えないよ。……まあ、諫言はまた今度にしようか」

ロベルトは彼女を見つめた。その焦げ茶色の瞳の奥に何かがちらついた。

二年前とは比べものにならないほどに成長『してしまった』妹を見る。

本当ならば「大きくなったな」と言いたいところだった。しかし、その味気なくも温かい一言が、喉の奥につつかえて妹の元に伝達されることを強情に拒否した。

ストップをかけた者の正体は、『大人になる』という現実を額面通りに受け取らせない彼女の悲痛な境遇だった。かけるべき言葉はとっさに両手からこぼれ落ち、そこに残ったものは、運命という絶對者に抗うことを諦めた己の手だけ。薄汚れた無能極まりない手の平だけだった。

（あと何年だったかな……）

湖底から浮上する気泡のように、寂しげな心情が彼の顔の外に飛び出して弾け、含まれていた虚しさのみが空気に味を付けた。それを鼻から吸い込み、溜息として吐き出しそうになって、彼ははつとする。

駄目だ。同情など彼女は望まないはずだ。自分はただ彼女の兄を置いていればいいのだ。

波紋に歪んだ顔面を心の内に引きずり込んで、精一杯の笑みを浮かべて見せた。

「うん、見ない間に大きくなるもんだなあ。見違えたぞ。今年で十一歳だったかな？」

「十二歳よ。妹の歳くらい覚えていてよね。ロベルト兄さんも髪が随分と伸びたわ。それに、なんか前よりがっしりしたというか……」ソフィーは細腕で兄の肩幅を測る仕草をした

（十二歳か……）「鍛冶職人になるにはまず剣の声を聞かなきゃならんっ！ とか親方が言い出してさ。弟子は早朝の鍛錬が必須だったから当たり前。髪を伸ばしているのは東部の流行なんだけど……似合っていないかな？」

「ふふっ。とつてもお似合いよ」

ソフィーが賛美するが、それには意味深な笑みが付随していたため、ロベルトは中々信用できなかつた。

彼の髪型は、以前の短髪が嘘のように、肩まで掛かる長髪となっていた。彼自身も、自分の髪型には少し自信が無かつたようだ。流行を取り入れることが自分にふさわしい身なりに繋がるとは限らない。ロベルトは東部でできた友人にその教訓を学んだのである。

与太話を一つ。

事の発端は、相弟子のジーンという青年が半年ほど前、当時流行りの髪型を真似しようとしたことである。ジーンは自分の面相も顧みずに、流行だからの一点張りで、忠告も聞き入れず髪を刈り上げさらには剃り込みまで入れたのだ。当然の如く彼の容貌は凄まじいものとなり、これまたもちろん弟子達は抱腹を禁じ得なかつた。よつてその友人が三日ばかり、鬼も呆れるような泣き面で泣き通したことは苦くも良い思い出である。もし事実が発覚すればジーンは鍛冶場からの追放を免れなかつた為（そんな男に情けをかけるほど親方は心優しい人物ではなかつた）、性格の良いロベルト他、二、三人が「あいつはひどく身体を壊してしまいました……」と虚偽で取り繕つた。

「あははっ。底抜けの馬鹿ね、そのジーンって人。なんでよりもよって刈り上げなのよ」ソフィーは目尻を拭った。

「でもな、冗談じゃなかったよ。親方に本当のことが知れたらどうしようって、俺らだけ冷や汗かいてるんだから。他の連中なんてどこ吹く風って感じでさ。なんにも関与してませんよって言いながら、口笛吹いてにやついてるし」ロベルトは眉をひそめて軽い憤りを口にした。

さああああああ

「あら……」

突然、つむじ風がソフィーの足下で渦を巻き、数枚の落ち葉を軽々と宙に躍らせた。二人の注意がそちらへ向いた。途端、会話は他愛もなく途切れ、挟まれた空気が世界の断絶の象徴として君臨する。理解不能の焦燥に駆られたロベルトは、壁を引き裂くように無骨な手を突き出した。指し示された先には、くたびれた表紙の書物があった。

そんな兄の姿を記憶に納めつつ、ソフィーは朗らかに笑っていた。造物の気配など微塵も感じさせない出来映えの、しかし一歩引いて見れば穴だらけの虚の笑みだった。無論ロベルトは気付かなかったが。

「ところでソフィー。それは一体何についての本なのかな？」ロベルトがそう問う。

途端、ソフィーは目を尋常じゃないほどに輝かせた。

「そうだ！ 兄さん聞いて！ 私ね、遂に巡り会ったのよ！」

珍しく興奮して、半ば周りが見えなくなっている妹に、兄は怪訝な表情で尋ねる。

「め、巡り会った？ 誰にだい？ まさか「運命の人なの！」とか言わないだらうね」と半ば冗談を交えても、ソフィーは反応を返さなかった。

「『誰』じゃないわ！ 使い魔ファミリアよ兄さん！ 三日前よ。今でも鮮明に覚えているわ。朝、目が覚めて洗面台で顔を洗っていた時よ。何

気なく下を見たら、足下に斑模様の卵が、ころころって転がったの。断言するわ。あの時ほど驚き、そして歓喜したことはないはずいや、そんな事はどうでもいいわ。とにかく、あと明日の夜にもなれば私は使役者マスターなのよ！」

ロベルトは、ずいずいと身を乗り出すように顔を近づけてくる妹に辟易とはしながらも、内心では早くも驚きと希望が産声を上げていた。

不運の星の元に生まれし少女を、完全に無欠に理解する相棒。

現在、学会は確率的に一人に一人が使い魔を操る使役者となるとの見解を示している。そこに条件や法則などは存在せず、白羽の矢の行方は気まぐれな運命に委ねられる。

彼はソフィーの小さな肩を前方に押し返し、そのままぎゅっと握った。

彼は思った。なるほど、妹の興奮も頷ける。自分としても嬉しい。しかし、彼女は使い魔を何と心得ているのだろうか？ 使い魔をただの愛玩動物と勘違いしてはいけない。使い魔は人間と共生し長い歴史を積み上げてきた高等生物だ。未だ解明されていない謎も数多く存在する。

多少気になったロベルトは、真剣な表情で前方の輝くの瞳を覗き込む。

「ねえ、ソフィー。その使い魔つてのが、巷ちまたでは何と呼ばれているか知っているのかい？」

するとソフィーは例の書籍を手に取り、繊細な指で捲り、わざと鼻にかけたような口調で朗読し始めた。学者でも気取っているのだろうか？ 莊厳さを醸し出そうとして失敗した感じた。その愛らしさと可笑しさに、ロベルトは耐えきれずに笑みを溢してしまった。

マリーは一部を抜き出した。

「使い魔ファミリアを研究題目とする者達は、時折、彼らのエネルギーの源が人間の生命力であると仮定し、彼らを悪魔呼ばわりする傾向がある。今は亡き、使い魔学の先駆者であるリアス・ホーキン博士を筆頭と

し、多くの学者が各々の著書において、次のように述べている」

調子が随分となめらかなのは、一度目を通していたからであろう。マリーはロベルトをちらりと見た。そして、再び目を落とす。口元が緩んでいた。

「『使い魔は、我々の魂とも呼べる不可視の概念に寄生し、ヒルの如く我々の精力を吸い尽くす。彼らはそうやって初めて、外形を保つ事を許されるのであり、生後一週間以内に宿主に巡り会えなかった個体は、文字通り霞のように消失してしまう。それ以外に彼らをどう捉えることが出来ようか』」

有名な論文だ。ロベルトは使い魔学を毛程も学びはしなかったが、それでもこの一文だけは知っている。

「使い魔とは、全長五十センチメートルほどの小柄な生物である。姿形はまさしく人間を押し縮めたそれであり、故に小人こびとと呼ぶ地域もしくは見受けられる。呼び名の通り、人類に使わされる存在である。彼らは人間の庇護欲、もしくは愛護欲を沸き立てる容姿をしている。雄雌、両方が生息しているが、どちらも、すこぶる、可愛らしいのだ（マリーはここを強調した）。先のホーキン博士の論文から考察すると、これは植物が色とりどりの花々を咲かせ虫を呼び込むようなもので、効率よく人類へ寄生する為の戦略的進化であると思われるが、真相は定かではない。使い魔がいつ頃から人類の生活に密接するようになったのか、著者自身も幾度となく考古学の書を紐解いたが、事実は闇に沈んでしまっているようだ。諸説の内でも有力とされているものは、異邦者と呼ばれる『外来』人種との関係性を指摘する論文である。使い魔の本質は異邦者の道案内人である、というのだ。著者自身はこの見解に懐疑的ではあるが……」

ソフィーは一旦息を整えるべく深呼吸をする。
慣れない声のせいかな、少しばかり苦しかったようだ。

一陣の風が頬を撫でた。草木がざわめく。空気に湿り気を感じた。ロベルトが空を見上げれば、あれほど青々としていた東の空は、いつの間にかうずたかい積乱雲に塗りつぶされている。不吉に黒みを

帯びるそれを見やることで、ロベルトはもう少しで降り始める事を悟った。

「使い魔については、兄さんの心配は無用だったみたいだね。ソフィー。今日はもう屋敷に戻ろうか。いや、そんな顔しないでくれよ。夕食前にもまた、講義を受けさせてもらいますよ。よろしいですか、ソフィー先生？」

ロベルトは妹を宥める^{なだ}為、多少気取った口調でそう言うと、尚も不満そうなソフィーの手から、分厚い活版本を取り上げる。

妹の性格は把握している。意気揚々と兄へ講義を行っていたのに、中断を勧告されて気分を害したのであろう。ソフィーは他人よりも幾分か聡明な少女で、元来他人に教えるという行為が大好きなのだ。幼い頃から学業不振で有名だったロベルトは、何度か妹に講師を務めてもらったことがある（七歳年下の妹は、既に兄の知能を軽く凌駕していた）。決して出来ない兄を馬鹿にすることがなかったため、おかげで一心に勉学に励む事が出来た。彼女は他人に知識を見せびらかすことに喜びを感じるのではない。単に相手の見聞が自分の手で広まり、故に。

「本当に？」ソフィーは覗き込むようにロベルトを見上げた。上空で了承することしか出来なかった。それでも、少女は屈託のない笑顔で嬉々としてみせた。

彼女の傍で腰を落ち着けると、決まって考えることがある。人の手によって未来と可能性を奪われたこの少女は、本当に現在の生活に満足しているのだろうか。誰かの感謝の言葉や表情だけで、果たして彼女の心の闇を緩和していたのだろうか。誰かの温かい眼差しは、温もり溢れる呼び声は、彼女の人生に決定的に欠けた物の代替品となり得ていたのだろうか、と。

自分と同色の瞳に目をこらしても、ソフィーの内面は透けては見えず、頼りない自身の写影が揺らぐことなくこちらを見つめるだけだった。

なぜこの少女だけがこんな目に遭うのだろうか。今まで幾度とな

く滅してきたはずの疑念は、意識の有無に拘わらず、彼女を前にするだけで容易に膨らみ彼を圧迫する。

ロベルトの両親は口を揃えて言う。これは、今は亡き叔父叔母の不浄の行いが招いた惨事なのだ。辛いかも知れない。だが恨むべきはあの男女なのだ、と。分かっている。因果関係は正しく成立している。あなた方は正しい。そんなこと分かっている。

……でも、それは彼の呈した疑問の答えになっていない。過ぎ去った出来事を聞かされても、恨みの矛先を教えられても、ロベルトは一向に釈然としなかった。

なぜ？ この少女に、一体どのような罪があったというのか。

一遍でいいから、神様を問いただしてみたかった。

「まったく。君に嘘をつくことで僕に何の得があるってのさ」目を逸らしてそう言った。

先ほどまで充滿していた夏の気配が、空を覆う黒雲に追いやられていた。

門の付近に繋いでおいたロベルトの愛馬に、ソフィーは恐る恐る近づいていった。兄の予想の違わず、この温厚な馬は妹に対してもすぐに心を開いた。ソフィーは灰色のたてがみに目を奪われている。「もういくよ？」と幾度となく催促しても、ソフィーは「あと少しだけ」と言つて、何遍もたてがみを撫で続けた。こうなると、とても動かないのがソフィーだった。

退屈凌ぎに手元の書物を開き、妹の朗読していた項に目を向けた。あれでもソフィーは大分要約していたらしい。目眩がするほどの文量である。ロベルトは鍛冶場での修行に明け暮れるあまり、こういつた専門書には長らく手を付けていなかった。昔の勉学の辛い記憶が鮮やかに蘇った。

情性で、次の項にも意識が向かう。

(使い魔の性質として、生後初めて生身で接触した人物に終始仕え、絶対服従を約束するというものがある。ここで面白いことが、人類に服従するのではなく、『個人』に服従することだ。彼らは、栄養源であるはずの人類の存亡を気にかけないのである。ここから、使い魔は無意識に人間との共存性を求める、という学説に矛盾が生じる。歴史の名を残す戦いの中でも、主人の命の元で使い魔は多大な量の人間を虐殺している。

しかし、彼らは主の死^{メスター}だけは 『人間の死』ではない 極端に恐れ防ごうと健気にも奮闘する性質を持つ。なぜか？ 主の死がそのまま己の死に直結するからである、というものが定説ではあるが、これにも幾つか矛盾点が存在している。また、彼らの死に様についてはホーキン博士の論文の通りだ。文字通り霧散してしまうのだ。気体にすらならない。故に何も残らない。研究においてもこれが最大のネックとなっている。生きた証、骨格が残らないのである。故に、彼らがいつからこの世に生息していたかについて、人類は先祖の記憶に頼るしかないのだ。化石も存在しないのだから)

「ロベルト兄さん。私ね、一つ聞きたいことがあるの」

ロベルトは顔を上げた。背を向ける妹の髪先が、横殴りの突風に当てられてばらばらにはためく。木々のみならず心をもざわつかせる不思議な力を持つその風は、この地方では雨の予兆として知られていた。視界の中心に居座る少女の横顔はひどく大人びていて、まるで等身大の彫刻でも見ているかのようにだった。出来ることなら、永遠にそのままの姿でいてほしかった。

「何だい？」ロベルトは首を傾げて続きを促した。ソフィーは躊躇するような素振りを垣間見せたが、息をつくと、落ち着いた口調でこんな問いを兄へ投げかけた。

「私の幸せってどこにあると思う？」

答えることは出来なかった。急所を的確に突かれた気分だった。

彼女は固まる兄の代わりに言葉を紡ぐ。誰かに語りかけるようだった。

「伯父さんは、私に許される最大限の自由を与えてくれた。そういう価値打ちのする書物（ロベルトに抱えられた本を指さした）や隣国の高名な菓子も気に入った服だって、問答無用で買ひ与えてくれた。我が儘を言ったら、伝統を重んじる　お堅い長老たちに取り入って、退屈な学校も行かなくてすむように取り計らってくれた。私が望めば全て叶えられた。物だけじゃないわ。叔母さんの腕の中はいつだって変わらずに温かかったし、料理だって本当に美味しかった。妹思いの優しい次男は一番の遊び相手になってくれた。難しいことばかり言いたがる、からかいがいのある長男もいた。覚える？　スー兄さんの飲み物に辛子のエキスを目一杯入れた時のこと。楽しかったわ。そう、楽しかった。私は溢れるほどに豊満な愛を享受していたの。私は幸せだった」

ぼたつぼたつと確かに降雨が始まった。終了したかに思えたソフィーの独唱。しかし予想を裏切り、「でもね」という接続詞がその続きを示唆した。

「……でもね。この頃よく思うの。これは本当の幸せって言うのにならなくて。このままでいいのにならなくて。ロベルト兄さんは鍛冶職人になるって夢を追い求めている。スー兄さんは家業を継ぐべく一心不乱に勉学に励んでいる」彼女は懸命に偽りのない言葉を探した。「二十歳になるまであと八年しかないわ。誰だって知ってる。私に与えられた猶予はそう長くはないの」

ロベルトは固唾を飲んで見守った。縦に伸びる雨粒が、視界にモザイクをかけていく。

「このままだと私、ただ生まれて、愛されて笑って楽しんで、ただ死んでゆくだけ。何も成さずに死んでゆくだけ。そう、私の生きた証はどこにもないの」

それは……ロベルトがつい五分前に考えてたこと、そのものだった。

「そんなの嫌だわ」彼女は明確に否定した。「こんなに不自由ない生活を約束されていて、生意気な奴だって思う？　強欲な奴だっ

て思う?」

口を閉ざしたソフィーはしつかりとこちらを見据えた。

「……思わないさ」口は自然と動いた。

歩み寄ってきたソフィーは、ロベルトをぎゅっと抱き締めた。

「身勝手かもしれないけど恐らくこれが最後のお願いよ。私を街から、あなた達から旅立たせてほしいの」

少女は断固とした口調でそう言った。

この時、ロベルトはソフィーの意思を尊重しようと思った。だが、実のところ、彼は妹が街を出ることに肯定的にはなりきれてはいなかった。それは彼だけでなく、他の誰に訊いてもそうだっただろう。この辺境ダマスタは、彼女にとっての唯一の安全地帯と言っても過言ではなかったからだった。彼女が記憶にないのも無理はないが、十年前の秋口のこと、片言を話し始めた無垢な赤ん坊が秘密裏にこの地へ越してきた日、彼女を片手に抱く黒装束に身を包んだ父の従者の姿を、ロベルトの脳ははっきりと記憶している。

頬は焼けただけ衣服は焦げ付き、片腕を肩からすっぱりと切断され、血の匂いを撒き散らしていた。それだけではない。男の両目は剔られて、そこだけぽっかり空洞になっていた。この程度の代償など安い物だ、彼女はきつと俺の分まで幸せになってくれる、とそう笑って男は翌日死亡した。

人間の生々しい一面を見せつけられた子供時代だった。

第六話 始点

言語置換魔術 使用中

「……という事情があつて、私の血は特別に呪われているのよつ。

だから私は二十歳までしか生きられないのつ。二十回目の誕生日を迎えた途端、ブシャツ！ よ。分かった!？」

あまり口に出したくない話題をせがまれ、口調が荒くなっているのを自覚する。

「血の呪い、ですか」気の抜ける、そして若干浮いたような声が言った。

「そう、この島国に生まれる子供にだけ課される『出生年の呪い』っていうやつよ。私たちは二十歳になるまでに、それぞれの年に象徴されている、獣、魔物の血を口に含まなくちゃならないの。もしそれを怠ると、体中の皮膚が引き裂けて、魂までも粉々に砕け散るって言われているわ」

「分かりました。それで、なぜマスターの死が確定しているのです?」

「だからあ……っ」

ソフィーは無益と知りつつも齒噛みして、現在に至らしめた過去の自分を呪った。目の前に正座する無駄に難しげな思念顔を見やり、やや大袈裟に嘆息する。

身長はロベルトよりも拳二つほど下といったところか。どこか喰えない雰囲気の少年だった。つい昨日湯に浸かったばかりの肌色は本当に男かと疑うほどにきめ細やかで、彼が剣奴の出身とは微塵も感じさせぬほどに健康的だ。

「あなたこれで三回目の説明よ? いい加減、学習したらどうなの?」

「しかし、度々翻訳不可の単語が出てきては、どうにも話が上手く繋がらないのです。それと、何か頭にしこりがあるような感覚が、

いつまでも続いていて。思考がはつきりしないというか……。額を打った時にでも障害の類をおこしたのかもしれない」彼は頭をさすりつつ、あくまでもぼんやりと言う。

「普通、そこでの定型は『申し訳ありません』ではなくて？ 自我もまるまる残っているみたいだし。頭が働かないのは副作用かしら。まったく訳が分からないわ。あなた、本当に王都で呪術を刻まれたのでしょうか？ それともまさか曰く付きの代物なの？」

現在も彼が片手で弄っている肩まで伸びた柔らかかそうな黒髪は、縮れ毛の女性から濃い羨望の眼差しを浴びるに相応しい艶やかさを放つ。額に垂れる前髪の隙間より覗く二重目蓋は、常時やや眠たげに垂れ下がっており、初めはどこか柔和で抜けた印象をソフィーに与えたものだった。

しかし……

先ほど、新天地の嗅ぎ慣れぬ空気を吸い込みながら、寮の扉を開けた。壁の木目が古びた印象を与える少々狭めの室内だが、下男による掃除は隅々まで行き届いており不快な気分はしない。天井が低いのは我慢するでしょう。現在腰を下ろしているこった造りのチェアも中々座り心地が良いし、同じく木製のテーブルもセンスがいいのではないか。見たせえば高級そうな絹の寝具が目にとまり、壁に設置された台の上には早速テキストブックが山積みになっている。総じて悪くない、悪くない自室となりそうだった。

……だが、

しかし、なのだ。

ふと気付けば、ソフィーの視線は彼の前腕に貼り付けになっている。る。

New world level 6

それは鮮血よりも鮮血らしい紅色だった。

恐らくはこれからしばらく衣食住を共にする少年を、体の良い奴

隷とすら見なせない原因がそこに記されていた。

端的に言うなれば、ソフィーは彼を激しく嫌悪していた。そうは言っていられない状況ではあったが、出来ることならば視界に納めることも回避したいくらいだった。

「なんて馬鹿げたドジを踏んだのかしら……」米神を指でほくしつづ、ソフィーは半ばヒステリックに呟く。その様を眺めた彼が首を傾げていて、尚更に彼女を苛立たせた。

いや、実際そうするしか方法がなかったのだ。これは彼女の選択などではなく、総じて運命の悪戯と言えた。なぜなら、あの瞬間に彼を抱き起こすことを拒否していれば、商人だけではなく幌馬車に乗っていた『罪なき奴隷』たちまで皆殺しになっていたはずだ。彼女は自分出来る最良の行動をしたに過ぎない。あの時

彼女をこの状況へと誘った不可思議な経緯を順を追って叙述するには、多少なりとも手間を要する。

一枚の葉が肩に落ちたその時から、目に見えないところで何かが巡り始めた気がした。

夏の盛りのことだった。

ミーン ミーン

屋敷の外の木々にへばり付く蝉、うんざりするほど変調のないその大合唱が一ヶ月間相も変わらず鼓膜を揺らす中、もう一人、頑迷さを貫く者がいた。

「ならん！ 断じてならん！」

頑なに振られ続ける野太い首が、昨日と変化なく左右に往復したのを見て、ソフィーは目に見えて酷く落胆した。何度目の嘆願だったであろうか。いい加減、諦めの念が心にわだかまり始めている。

普段なら娘の要求を二つ返事で了承する伯父の意思は、この件においてのみオリハルコンをも凌ぐ堅硬さをもって彼女を阻んでいた。

……だが、今回ばかりは折れるわけにはいかない。

「ねえどうして許してくれないのよ！」ソフィーは机に向かい執務中の男へと必死に叫ぶ。「魔法都市の入学試験まであと二ヶ月もないのよ！」

すると書類の山から手を離れた男は「お前は……」と口を開きながら眼前の少女を冷酷に睨め付けた。思わずすぐみ上がるほどの迫力に耐えつつ、ソフィーはキツと対抗する。

「お前はここを飛び出すという行為、それに伴う危険がどれほどのものかまるで理解していない。十年経ったからなんだというんだ？ 迂闊に人前へ出て、ひよんなことで本名を晒してみろ。すぐにあのいかれたカルト集団がお前を取っ捕まえて、悪名高い呪人裁判を執り行うぞっ」

呪人裁判とは『覇権戦争』時代の公開処刑を指している。その名のとおり『呪い』を身に宿した者を貼り付けにして火で炙り、悲鳴も絶え絶えとなり死に絶えそうになった対象の心臓に鉄製の槍を突き刺すというものだ。心臓そのものに魂が宿ると考えられた当時、それを貫くという処刑法は他を凌いで最も残酷な手法と考えられていた。非効率的ながら、古きを尊ぶ者たちの間では現在も伝承に則ってこの裁判が行われている。

「それでも……」ソフィーは険しい顔をして食い下がる。

その返答に反抗の意思を聞きつけ、男は机上を割れんばかりに叩いて立ち上がった。数枚の羊皮紙が衝撃で宙に舞い、そして床に落ちる。

「大体だ。何度も言うが、こんな贅沢極まりない生活をさせてやっているのに、なぜそんな戯れ言を口にするんだ。世の中には明日の飯にすら困る輩が大勢いるんだぞ。これは本当の幸せじゃない？ もう少し謙虚な心を保ちなさい。父さんはすこぶる不愉快だっ」

幾度とない押し問答の繰り返しだった。

「そのことについては感謝しているって言っているじゃない！でも目標も持たずに日々を過す……」

「なら、とやかく言わずに今すぐここから出て行きなさい！」

豪華な室内に張り上げられた声がソフィーの前面をひりつかせた。

「さっさと出なさい！」

ここぞとばかりに追い打ちがかかった。

結局、着地点の座標に前日と粒一つの違いもなかった。

「あくもうつ、あの陰気親父い！」どうしたって話の通じない男に業を煮やし、自室へ戻ったソフィーはだんだんと地団駄を踏んだ。のみならず寝台の上に飛び乗ると枕を抱きしめ、膨れた面を綿の柔らかさに埋もれさせた。顔が蒸れただけだった。

魔法都市の入学試験まであと二ヶ月しかない。自ら放った言葉を頭の中に反芻した結果、ソフィーは気が落ち込むのを感じた。自然、焦りが心拍数を押し上げるが、なす術はない。

ここ一ヶ月ほど、このような膠着状態が続いていた。いや、あの男は頭から話を聞こうともしないのだから、勝負にすらなっていない。依然、仏頂面のひび割れもそこから差すはずの光明も拝めずにただ時間だけが過ぎていくだけだ。この状況で気力を保てという方が難題だ。

「ソフィー。この度も前進なしですか？」

子供特有の甲高い声がソフィーの名を呼んだ。

「……ルヴェルか。なあんであなはまた、好きこのんでそんなとこに挟まってるの」

寝台の下から響いたくぐもった肉声の主は、だらけきった声を放る。

マットのふちにか細い手を掛けて、ルヴェルの小さすぎる頭がひよっこりと現れた。うんしょっと寝台の上に乗り上げられた全身が、ソフィーの視界にまるまる収まる。主人と同じ暗褐色の短髪の下に映える中性的な可愛らしい容姿、つばらな瞳に桃色の唇、全長五十

？そこの人間そのものの体付き、それらの特徴はルヴェルが『使い魔』と呼ばれる種族であることを示していた。

現在は煌々と燃える火の玉が中天にかかる頃合いであり、採光性抜群のガラス窓からは目に毒なほどの光量が注ぎ込まれている。使い魔はぱつちりとした目を眩しそうに細めながら、何かを払うようにかぶりを振った。ルヴェル特有の眠気を覚まし方である（とソフィーは最近気付いた）。

「卵の中にいたときから、太陽はどうも好きになれなくてですね」「いせいそもそもシートの上を四つんばいで這いずり布団の中へすつぽりと潜り込んだルヴェルは、あごを肘付いた両手で支え、上目遣いで顔だけを主人に覗かせた。行動がいちいち可愛いやつだと思った。

「つくづくあなたも変わった使い魔よねえ。……そんなことして暑くないの？」

「自覚しています。それと、使役者の身体に触れていないと体温が極端に下がってしまう、と先日お話ししたばかりでしょう」

使い魔はやれやれと首を横に振った。

「いえ、それよりもソフィー。どうしましょうか。このままでは魔法都市の「魔」の字すら目にかかれませんよ。悠長に手紙の文字を信じるだけではすまなくなってきましたいるかもしれません」

「分かっているわよそんなこと」ため息を一つ吐く。「でもどうしようもないんだもの」

実際、どのような手段を用いれば、あの本家の鉄も唾然とするほどの鉄仮面を割れるというのか。ソフィーはあらゆる観点から検証を行ったが、傑出した名案が天から下りてくるようなことはなかった。

「よろしくない方法なら盛りだくさんなだけだね。偽名を使う、誰かとすり替わる、死亡に見せかけ第二の人生へ」

「どれもご自身で却下されたものばかりじゃないですか」

一も二もなく否定され、そこに長らく溜まった鬱憤も相まって、

ソフィーはやりきれない気持ちに襲われた。

「無理なのかなあ……」

ソフィーが伯父に楯突いてまで魔法都市に固執するのには、誰にも言えないわけがある。見返りが外界の景色を拝む無二のチケットかもしれないとあれば、一見して全てが伯父の怒りの源に還元されていそうな彼女の行動も無駄にならないというものだ。

「ねえ。もう一度だけあれを見せてくれない？」

即座、主人の命令に従う。使い魔は夏も峠という時期をまるつきり無視して着込んだセーターの懐から、ある男の置手紙を取り出した。一応は手紙に分類されるであろうそれは、しかし時代に見合った紙製ではない。傍目見れば、手のひらから僅かにはみ出るか、といったほどの面積の葉っぱでしかなかった。

夏の始めのことだ。例の教会の巨木に背もたれ読書に勤しんでいた彼女の肩に、それはひらひらと舞い降りてきたのだった。もちろん初見でこれがどういったものなのか分かるはずもなく、その時はただ手で払おうとしたのだが……これが中々服に引っ付いて離れない。一体？　と思ひ注意して見れば、驚くことにそこには文字が記してあったのだ。

「トライル」室内でも用心して、ソフィーは『鍵言葉』を自身にも届かぬくらいひっそりと呟き　途端、葉肉を支えていた薄黄緑の葉脈が一斉に細かく千切れたちまち散り散りになって、濃緑色の表面に読み取りづらい文字の群を構成する。一つの音声に従い特定の形を指すその様は、数百の蟻がソフィーの指揮に反応して足音高らかにマーチングバンドでもしているようだ。時間に流れされたのだろう、文字が欠けているか、全くの空白になってしまっている箇所も目立つ。

どんなに田舎の芋臭い農夫でも簡単に理解できる。それは明らかに魔術による手紙だった。

以下、葉面より

親愛なるソフィー　十年後のソフィーへ

これを書いている今でも、成長したあなたの驚く顔が目「浮かびます」

初めましてと「わなくてはなりませんね。私はルネと申します
覚えていらしゃるでしょうか

あなたの父親を演じている「ろうライオネットの従者を務「ていた男です

あなたがこの隠された手紙に目を通す頃には、私は既「亡者にな
っているでしょう

しかし自分の命を惜しむ気は起きま「ん。なぜならあなたがいる
からです

ここまで読むと　恐らく時間差で変化するよう設定されている
のだろう、にわかには信じがたいが　文章が一変に塗り替えられ
た。相変わらず細々と読みづらい文字で続きが書いてある。しかも
二枚目以降は劣化が更に侵攻しているのか、虫食いのように意味を
なさない文字が増加しては解読を困らせる。

ソフ「ー、私からたつてのお願い「あります

実のところ、私はある「運命を見通すことを許されてい「す
馬鹿なこ「と思うのなら、次に言「ことを試行「て「ください
自由を手「したい女の子

あなたの伯「ライオネットに、魔法都「へ行きたいと仰るのです
断られても構「ずに、何度も何度もです

理由「お話し出来ませんが、これだけは約束できます
その行為は、き「とあなたを自「へと「放つ鍵となるでしょう

再び変遷が訪れる。確実に文字化けが酷くなっていく。

ライオネ「は私にいく「重大な機密事項「漏らしま「た

一つは、赤子だった。たを救出させ。です
それは、あなたが予。ったから
やつらは。書に。を修。すべく。必要と

私はやつ。の企みを食い。い

どうか願い。聞き。てください

あなたという。に。を投げ打つ。私

世。をもちらし。さい

3。45。ルネ

再読。は。ライルと

手紙はここで終わっていた。重要な事柄が面白いくらい伝達不能
になっている(多分)過去の文章は、ソフィーの頭に多くの謎を残
し、眼前では葉が猫をかぶって己を演じているだけだ。

ソフィーは自らも広い寝台へ寝転がると、使い魔と同様のポーズ
を取って彼と向き合う。あいだにひらつと手紙が置かれた。

「これ、本当にルネが書いた物なのかしらね」手始めにソフィーは
率直な疑問を述べる。「あの瞬間、誰かが幹の上に居座っていて、
いたずらにこれを落とすという線は……」

「絶対にありません。あの時の僕は、どうにか陽の光に慣れないも
のか、とずっと木の葉の上を眺めていましたから。何者の気配も感
じませんでした。その葉は間違いなくあの大木のもですよ」追加
して「僕はルネ自身が筆を走らせたものだと思います」とも言
った。

「でもねえ……」煮え切らない真実が歯がゆくてしょうがない。ソ
フィー宛のこの手紙が本当にルネが書き記したものであると信じる
には、それに値する明確な証拠が欠けているのだ。安易に決めつけ
るには、ソフィーの生い立ちには黒い境界線をいくらか越え過ぎてい
る。「あのカルト集団が私を外界に誘き出すために使った罠、って

「いうのは考えられない？」

「あなたを『魔法都市』へ誘き出すことでどうするのですか。それに……。そうですね。もしもこれを落としたのがそのカルト集団だったとしましょう。僕だったらこんな回りくどい手は打たず、即座に殺すか、もしくは隠密に誘拐しますよ。手紙の存在をソフィーが伯父様に知らせでもすれば、厳重な警護を布かれることは予想に難くありません」

では、この手紙は本当に過去から現在のソフィーへ書かれたものかというのか。それもどうも嘘くさい。第一に、樹木に魔術を施すのはともかくそれが十年前の術式であるとすれば、今尚発動していることはすこぶる不自然である。数多くの魔術関連の書物を紐解いた経験が、両の意味で彼女に踏ん切りをつかせない。

「あの巨木は血吸木のような魔術的な重要アイテムではないの。でも、だとすれば術式に注がれていたはずの魔力はどこから供給していたの？」

「それは時間差で作動するタイプの術式だったのでは？ 例えばその葉のように」 使い魔は自前のもやしより細そうな指で目の前の薄っぺらい葉を指した。

「そんなの書物でも見たことないわ。それに、ルネが魔術を使えなかったことはロベルト兄さんにも確認済みだし」 ソフィーはため息を吐いた。「万一、そのレアで高等な魔術をルネが扱えたとして、これほどの術を完成させるにはたしか相当な下準備が必要なはず。そんな鈍くさい真似事を伯父様が見逃すはずがない」

では、誰がこれをソフィーに宛てたのか？

ソフィーはこの件に深入りすることを、あわくではあるが恐れていた。闇夜に沈む岩礁に怯えながら航行する貨物船にでも乗っている気分だ。敵は見えない。されど、どこからか、じつとこちらを見据えているのである。

正直な話、気味が悪い。

「手紙の要求を飲みましょう」といって聞かなかったのも目の前

の使い魔であり、ソフィーは最初から乗り気ではなかったのだ。

ソフィーはこの不毛な話題に一端の区切りをつけ、別の視点からものを考えることにした。

「仕方がないわ。確証はないけれどルネが書いたものと仮定しましょう。して、この内容は一体どういうことなのかしら」

「三枚目の二行目は『赤子だったあなたを救出したわけです』でしょうね」

「多分ね。まったく、その下の行が重要だったのに。『あなたが予………』だったから』じゃあ検討もつかないわ」

続いて、使い魔はやや核心をつく問いを放った。

「そういえば、やつらという組織……にはライオネット伯父様も含まれるのでしょうか」

「それは……」

その言葉一つで場がしんと沈黙する。重い空気が動かない中、意識的に思考を手放せば、鼓膜に単調な蝉の鳴き声だけが近づいて来る。

「……うん。そう……なるのかしらねえ」ソフィーは上の空で呟いた。

自分をここまで育て上げてくれた人が、実は密命から仕方なく自分を養護していた。伯父が大好きというわけではなかったが、あまり信じたくはない話だった。

しかし現実では、ソフィーはある程度までしか自分の生い立ちについて知らされていない。当時赤ん坊だったのだから当たり前だが、それは他人の口から聞き及んだ話であり、今考えると捏造された可能性もなきにしもあらず、だ。

「うー。もう何を信じればいいのかわからなくなってきたわ」ソフィーはシートに顔を埋めて突っ伏した。視界が光混じりの闇に覆われる。直に触れた布から花の良い香りが鼻孔に流れ込んだ。

「確かソフィーの伯父様は、呪人裁判で処刑が決まった赤子が弟の娘だったから、今は亡き従者に命じてあなたを攫わせた、とか」使

い魔は可愛らしい顔をしかめた。「なにか……」口を閉ざす。

「これまで感謝こそすれ疑ったこともなかったけど、冷静に考えれば辻褃が合わないのよね」ソフィーが渋々後を引き取った。「もっと言えば、どこかきな臭い」

「何か目的か報酬がなければ、あなたをカリ又教徒から奪還する危険は冒さなかつたでしょう」

「じゃあ、その目的か報酬ってのは一体何なの？」

「それを解明するには手紙に頼るほかありません」

「だけじゃあ情報が少なすぎるわ」

再び沈黙がやってきてソフィーの背中に陣取った。「わかるはずないっ」叫び、ぱんつと寝台を叩けば薄っぺらい葉がふらつと浮遊した。軽い、これほどにまで軽い物体に、これほどまでに追い詰められている。これは何だ。葉っぱでもただの手紙でもないこれは。ルネはこれを書き残してソフィーを……一種の遺書なのだろうか。外見に見合わない一枚が、ずしんと心に重い。

私は誰を信じればいいのだろう。ソフィーは内に思った。伯父はいつでも無愛想で仕事にかかり切りだったが、時々ま父親らしく振る舞おうとソフィーに人生の教訓を聞かせたり、ロベルト兄さんと三人で仲良く遊んでくれたりした。欲しがる物を何でも買い与えていたのだから、心の底では仕事しか眼中にない自分を申し訳なく思つてのせめてもの罪滅ぼしだったに違いない。違いない。違いない。(本当にそう?)

全ては偽りだったのか。伯父はソフィーに何かを隠している？

『あなたが予………だったから』そもそも、ルネはソフィーが何者だと言うのか。自分の命を捧げてまで呪われた赤子を守り通した男は、ソフィーに一体何を背負わせたかったのだろうか。『私はやつらの企みを食い……い』安直だが推察するに『私はやつらの企みを食い止めた』だ。やつらの企みとは？ それをルネは快く思つていなかったのようだ。なぜ？ ルネは善悪どちらの味方なのか？ (私はルネを信じて良いの？ それとも伯父様を信じなければなら

ないの?)

二者択一の袋小路に追い詰められた主人に使い魔は助け船を出し、
こう話を締めくくる。

「今は取り敢えず手紙の内容を遂行してみるのが、あなたにとって
は吉ではないかと思えますよ。ソフィーは自由を手に入れたいので
しょう?」

「……まあ。どうせこのまま死ぬのならば、ね。私はもつと大勢の
人の為になるような仕事をしてみたいし、いろいろな人たちと会話
してみたいとも思う……けど」

未知の世界への望みがあることは事実。しかし歯切れの悪い言葉
しか返せない。無理もない。この試行を続ければ、それは伯父を疑
いを抱くことに繋がる。少女は良心の呵責に苛まれた。親代わりの
男の黒い部分を覗くことも忌避していた。

それでも「この件は、もしかしたら危ない橋かもしれないけど、
私にとって外へ飛び出す一度きりのチャンスでしょうから」と言い
聞かせ振り払った。

ライオネットの頭の硬さは折り紙付きだ。今回のような摩訶不思
議な力の助太刀なしには、ソフィーの望みが叶えられることはま
ずないと見える。

「とは言え、いい加減あのしかめっ面もふつつとしていてから注
意しないと。鉄仮面が別の意味で割れれちゃ世話ないわ」

第七話 絡繰り時計は廻り出す

チエン チエン

半身のみを起こして思いつきり伸びをすることで、身体の随所に滞った血流を後押しする。だが、巡りだした生命の源も、胸に沈殿した思いを流し去ることは出来ない。

九月初旬のすがすがしい朝のことだ。太陽は変わらない今日を照らし出している。

早々にぼつりと呟いた。

「嘘つき」

ソフィーがここまで半分意地で続行していた嘆願は、漏れるところなく徒労というカテゴリに分類されていた。秋の只中に行われる魔法都市の振り分け試験まで、残すところあと約一ヶ月を切っている。

時が流れてゆくにつれ、やはり自然も移り変わってゆく。鼓膜を悩ませた蝉の響きが空気を陣取ることもなく、残暑に針刺す涼風を肺一杯に溜め込めば、既にほんのりと秋が香っている。季節に取り残されたように孤立する夏の友人達を見つucker度、ソフィーはその生命に自分の姿を重ねては寂寥の中に漂い、心に侘びしさを植え付けるあの紅の夕焼けを眺めれば、例年以上に質感を持った焦燥が胸の内をかきむしる。

現実的に考えれば、やはりあの置き手紙の内容は全くのでたらめだったのだろう。彼女は肩を落として寝台から身を降ろした。元より、根拠のない指示に従い、少しでも期待する方が間違っていたのだ。

しかし反面では、どうも捨てきれない願望がいくつかの抜け道を作り出している。例えば、あの手紙には別段、年を指定するような制約は記されていないなかったため、彼女は「来年がある」と口に出しては希望を先延ばしにすることで、失望の濃度を薄めようと空回り

の慰めを己に施していた。

ソフィーは顔を洗い軽く身だしなみを整えてから、自室の戸を開き、廊下へと歩み出る。

自らの使い魔がほくそ笑んでいることには気付かない。

蜘蛛の巣一つない清潔な寝台の下で、部屋から姿を消した主人をいつまでも見つめつつ、

にっしっしっ、と、

様子から察するに、何か良いことがあったのだ。

そう、彼からすれば一目瞭然の何かが。

「絡繰りの糸を裏から引くのも悪くない」

その独り言は、彼が扱えないはずの言葉だった。

辰の刻、午前八時。

世界のどこかで、お伽話の長針がカチリと進み始めた。

ぼやけた目を下に降ろせば、一面に敷き詰められた絨毯が視界を赤く染めている。甘ったるい芳香が鼻をつくのは、冷房装置に吸熱作用のある特殊な果実を使用しているためだ。今年、この独特の臭いを嗅げるのも、もはや僅かだろう。残暑は余すところなく駆逐され、薄着一枚の身では肌寒さすら覚えた。

これから降りかかる目白押しの怪奇に、彼女の脳がねじ切れんばかりに働かされることを考慮すれば、丁度良い相殺温度であった。

「おはようございます。念願が現実となりましたね。心からお祝い申し上げます」

「はい？」

食堂に向かう道中、すれ違いざまに頭を垂れた下僕が、微笑みながらソフィーに声をかけてきた。その時のソフィーは理解に及ばず返答につまり、きつとこの下僕は寝ぼけているのだと適当に解釈して、さっさとその場を後にするほかなかった。

不思議は続いた。食堂の扉を開けるやいなや、目に飛び込んできたのは旅装姿に身を包んだラジアン・ブルードだった。ガラス越しの陽光に、禿げ上がった彼の頭部が光り輝いている。唇の周りにたっぷりと髭を蓄え、同じく腹回りにも多くの脂肪を蓄えるこの肥えた男は、室内だというのに帽子も取らず、食事を無心で口の中へとかき込んでいる。一ヶ月ほど断食でもした獣の如く、鬼気迫る相貌で飯をたいらげていくラジアン。見れば、衣服の裾には泥の跳ねっ返りがこびり付いており、屋敷の掃除を担当する若い下女がしきりに眉をひそめている。食器とさじがぶつかっては、耳障りな高音を発していた。

ソフィーは数秒間、得体の知れない物でも見たような、別を言えばいてはいけない人間を眺めるような、失礼な目付きで彼を直視した。幸いなことに、彼は目の前のオニオンスープを飲み干すことに全力を注いでおり、彼女の視線に反応するには至らなかつた。

ソフィーがラジアンの姿をはつきりと捉えたのは、五年前が最初で最後だつたはずだ。たしか、開発された新種の穀物の収穫、その様子の視察を目的として、このダマスタの地に赴いたのではなかつたか。錆び付いていた記憶の中の男性と現実の光景とが一致する。

このでっぷりとした芋のような男、見かけによらず身分階級ではなり上位の部類に属しており（無神論者のソフィーからしてみれば失笑ものだが）、故に執務官の掲げた政策に口を出したり王都での通商を取り締まったりと、何かと多忙をきわめる存在だ。しかも、時期が時期、これから迎える季節は収穫の秋である。市場の流通が更に活発化する中での納税管理や緊急事態に備え、彼の仕事量も上昇しているはず。

さて、そんな男が、なぜこのような辺地の朝食をかつくらっているのか？

「えと……、おはようございます。ブルード様？」まるで状況が飲めない中、ひとまず、ひたすらにパンを咀嚼しているラジアンに挨拶を試みる。

彼はソフィーの姿を認めると、目を見開いて慌てて彼女に話しかけようとし、必然、口内の食物を喉に詰まらせた。見かねた下僕の一人が「大丈夫ですか？」と失礼を承知で男の丸い背をとんとんと叩いて、容器に入った冷水を差し出す。

「いや、ありがとう」

栓をされた気道が開通し、ぜえぜえと空気を吸い込む。布巾で口元を上品に拭う彼の挙動は、尚も不審そのものだった。先ほどから彼女と視線を絡ませようとせず「あっ、ああ。お前はたしか、ライオネットの……」などと口をもごもごさせるばかりで、積極的に壁際の陶器に焦点を合わせている。ソフィーは怪訝な顔をしながら（もしかして、私に関わることで何か良くないことでもあったのかしら）

と推測した。

「初めまして。ソフィー・イルジアーナと申します。いきなりで不躰ですが、このような朝早くに一体どういった用件で？」ずばり、聞いた。

傾げられた少女の細首と濁りのない茶色い視線に当てられて、ラジアンは更に狼狽して眼球をぎよるぎよると左右に彷徨させた。

間違いない。何か後ろめたいことを隠している人間の典型的な行動だ。

真実を引き出すべく言及しようと口を開きかけたところ、タイミング良く伯父が姿を現した。来客は明らかに安堵を漏らす。舌打ちしたい気分が駆られた。

「待たせてすまない。ラジアン」彼はソフィーを視線で押ししながら、敵かな口調で言った。お前に付き合っている暇はない、と暗に伝えていると思われた。当然と言えば当然。なぜなら最近のソフィーは伯父に相対するたび、呆れるほどにしつこく、魔法学院の件を口にしてきたから。

それにしても、ラジアン？ 敬称なしで呼び合うほど、彼らは親密な関係だったのだろうか。ソフィーの記憶する限り、そのような

事實はなかつたはずだが。

「やつと決心がついたのか、ライオネット。ああ、ごちそうになつてよ」

決心がついた？ 何の決心だろうか。

「具合が良いから、早速だが、彼女にも説明してやつてくれないか」
両者の視線が交差する。少々俯きがちなラジアン表情に、彼が言わんとすることの全貌を窺い知ることには出来なかつた。

彼女が必死に会話の内容を整理している合間、ライオネットが頷いて肯定の意を示す。

「そうだな。ソフィー、ついて来なさい」

伯父に連れられて向かつた先は、雑多とした彼の書齋だつた。まだ日が高く昇らない時間帯のため、薄暗さが抜けきらない。左右の壁に設置された本棚には、年代物の書物が所狭しと並んでいる。あちこちに見える何かの書類はそれぞれが山のように積み上げられ、机上もまったく同様の状態だ。この部屋に限っては下男も下女も掃除の免除を厳命されているため、吸い込む空気には咳き込むほどの埃が含まれている。

二人きりだ。しかもあのラジアンすら除け者にして。どれほど大きな厄災があつたのだろうか。

慣れた様子でライオネットがゆっくりと進み行く。ソフィーは後ろ手にドアを閉めた。ボタンという音を最後に全ての音源が遠ざかり、彼も部屋の中心で足を止める。緊張が胸に染み入るように押し寄せ、彼女は唾をぐくりと飲んだ。

彼は娘に背を向け語り出した。静まりかえつた室内に、男の声はよく反響した。

「今朝、ラジアンが伝えてくれた話だ。昨日、王都で正式に施行された法令について話そう」

「法令？」きよとんとしてそのまま返す。

実を言えば、それよりもラジアンが直々に早馬を務めたわけが気

になったが、雰囲気気圧されて黙っていた。察するに、ラジアンはソフィーの呪いと生い立ちについて知らされているのはいか。ライオネットは続ける。

「忌々しい悪法だ。お前、魔法都市の試験方法を知っているか？」

「ええ、もちろんよ。第一関門の筆記試験では、二十歳未満の男女のみが受験権利を持っているわ。続いて第二の関門は身体検査。主に魔術の行使において致命的な欠陥を抱えた、例えば魔力を練れないなんて者を篩い落とすことが目的。ただ今の世にそんな人は滅多にいないから、ただの形式的なものだと聞いたけど」

簡潔に答えに返すと、彼はふうつと息を吐いた。

「今回の法令では、試験者においてある『絶対条件』というものを定めた。勘違いするな。試験者が必ず満たしていなければならぬ条件じゃない。それを満たす者は必ず魔法都市を受験をしなければならぬ、という条件だ」

彼は緩慢な動作で振り向いた。まさか、とは思いつつ続きを聞く。「……その絶対条件って何なの？」

伯父はしばらく間を取って伝えるべきか躊躇する仕草を見せたが、やがて重い口を開いた。

「使役者であること、自らの使い魔を有していることだよ」

「あつ、えつ？ それって……」

頭に浮かんだのは使い魔ルヴェルの表象。耳に届いた言葉を脳が理解するにつれ、朝方の沈みようからは想像できないほどの晴れ晴れとした気持ちがあわき上がってきた。周りの景色が一挙に色づき、身体が歓喜に震えた。

そんな娘の心情を把握して、ライオネットの眉間に高低差の激しい皺が深々と刻まれる。

「手放して喜ぶんじゃない。お前、この法令の意図を分かっているのか？」

低く戒められることで、ふわふわと浮かれた心を地に足つかず。しかし、まるで反転した重力に晒されたかのように独りでに浮上し

ようとすると身体を押さえつけるのは、大変な重労働だった。だって、頭を押さええる役自身も浮き上がるうしてしまつから。

「目的は何なの？」それでも、頭の片隅では疑念が製造され始めていた。

目的……。使い魔を一カ所に集結させることに、何か利点でもあるのだろうか。使い魔を保有する者は、およそ一万に一と言われている。この国の全人口を八十〇百万人と推定しても、使い魔の総数は百越えるか越えないかがいいところだ。

質問に答える代わりに、ライオネットは机上から書類を手に取つた。角をピンで止められた数十枚の厚い報告書をソフィーに手渡す。すぐに彼女は目を通し始めた。

「それは、半月前に魔法都市の研究グループが議会で提示したものだ」

捲られていく速度が、枚数を重ねるごとに遅くなっていく。

ソフィーの顔が驚愕にゆがんだ。聡明な頭脳は記されている内容以上のことを暴いてしまう。

「これって……」

「裏はそういうことだよ。ソフィー」伯父は後ろめたそうな声で、言った。「それで、だ。あゝ、言いつらいが……」

こほんと、咳をした。

「お前に頼みたいことがある」

「来年の夏には一度帰省するわよ……」

二週間後、秋深まる九月の中旬。

雲一つない晴天を仰げば、どこまでも透き通つた青が視界に広がる。

商人の運搬する幌馬車の内部に身を潜めたソフィーは、粉塵よけの外套を羽織り、使い魔ルヴェルと護衛を兼ねた付き人を伴い、生

まれ育った故郷の地を後にした。街を二つ経由で魔法都市に向かう。見送ってくれた人々の中には、涙を流し彼女との別れを惜しむ者もいて、形容しがたい熱い気持ちが入み上げてきた。誰かが自分から旅立つことはあっても、自分が誰かから旅立つことは初体験だったため、他者との別離を一層新鮮に感じさせた。巣から飛び立つ雛鳥とはこういう気分なのだろうか。雛鳥もソフィーも、きつと同じ何かを見据えている。

(そうだ。私、ダマスタを出すのよ)

『街から離れる』という行為そのものに関して、不思議と彼女の心に何の感慨もわかなかった。課された使命に気を張っていたせいかもしれない。

馬の嘶きが出発を合図し、大地の凹凸が車輪越しに彼女の身を揺らす。街道を行く幌馬車の中で、ソフィーはいろいろなことに考えを巡らせていた。気を許せる友を見つけれらるだろうかとか、筆記試験は置いて、身体検査で万一にでも除外されたらどうしようとか。そんな他愛もないものもあれば、片や、入学したとしても寿命のつきるまでに最終クラスに進級できるだろうかとか、もしも裏の目的を果たせなかったらどうしよう、などと若干重いことまで。

使い魔ルヴェルが「緊張していますか？」と伺うように訊いた。

「ええ、やっぱり少しはね」

「そうですね」彼は一拍おくと「ところでソフィー。なぜあなたは魔法都市に行きたがっていたのですか？」と問いを發した。

「そんなの決まっているじゃない。私も夢を追いかけてみたくなつたからよ。ただでさえ縛り付けられていたから、尚のこと。そんな風に思っていた時、あれが……ん？ あれって何かしら？」

言葉に詰まった主人の思案顔を確認し、ルヴェルは居眠りを決め込んだ。

通り過ぎた道端、特に変哲のない落ち葉が、つむじ風の上で螺旋を描き宙を舞う。

役目を終えたそれは、ぼろぼろと風化したように崩れていった。

そして、不本意ながら、劍一本ツルギを携えた彼に救われる形となる。結果のみを言えば、彼女の乗っていた幌馬車が王都に到着することは叶わなかった。

横からの襲撃に、商人が愛用した商売道具は原型をとどめることすら許されなかった。

大柄な魔獣が数匹、遙か北方の雪原に分布するのはずの白狼だった。常時、時の流れに死の息吹を感じても、いざそれと顔を合わせるとなると、恐ろしさに膝が震えて動けなかった。情けない。

隣に居合わせた多くの奴隷を乗せた幌馬車も、同様に大破した。

大地が真新しい鮮血を嬉々として吸い込む中で、彼の近くに投げ出されたのは、まったくの偶然だ。

そこに彼がいたことに、神の導きなどありはしない。

無神論者の彼女からしてみれば、気の遠くなるほどの数を誇る生命、それ自身が織り成す現在という複雑な時間に想像の産物である神が介入するとはとても思えない。あるのはいつも何かの生み出す結果だけ。そして、そう思えば腑に落ちることがいくつもある。

例えば、猛る白狼の半数が、脇目もふらず彼女を目掛けて牙を剥いてきた理由なんかだ。

毛並みの美しい獣たちは、明らかに飼い慣らされた匂いを漂わせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6650v/>

宿り木と鎮魂歌

2011年10月10日03時18分発行